

石原 亨 著

越佐 傳 說

夢を 買ふ 話

加藤書房發行



始



特113  
664



買ふ話

加藤書房發行



## 小序

私は本書の成り立つた由來を述べる前に、大正十年頃から今日までの間に長岡中學校に籍を置かれて、私に本書の材料を供給された生徒諸君に對して厚く御禮を申し上げます。本書の成り立つたのは殆んど諸君のお蔭であります。

大正十年の七月でありました。私は夏季休暇の作文宿題を出さうと思つて、色々文題を考へて見ましたのですが、其の時、頭に浮んだのは何れも皆陳腐な題ばかりで、作るに何の興味もなく、却つて欠伸を催すやうなものばかりだつたので、いつそ文題隨意にしようかと思つてゐた矢先、ふと思ひついたのは「傳説」でありました。

これなら各自めいめい其の知つてゐる興味ある事柄をありのまま書くのだから、頭の痛くないこともなく、また肩の凝るやうなこともあるまい。そしてまた書いてゐるうちに事柄の内容に興味を覺えて、思はず筆がはずんで、意外の面白いものが出来るかも知れない。と、こんな事を思つたので、早速「傳説」といふ宿題を出したのであります。

すると九月になつてから私の手許に二百あまりの傳説が集つて來たのでありました。私は隙に任せて、學校に家にそれを讀みました。中には多少内容を異にしてはゐるがもと同一のものらしいのが十數篇ありましたが、兎に角、二百幾篇悉く昔の人々の趣味の自然に滴つて凝固したもので、さながら居間に於て内證話を聞くが如く、また秘親展の手紙を見るやうな床しさと優しさを持つてゐるものばかりでありました。それから後も多くの生徒諸君を始め、友人知人各位から色々の傳説を貰ひました、それが、今日までに四百あまりの數になりました。

私は其の中から同じ筋書のもは比較的文章がよくて面白さうなものを選び、少數の他國のもは割愛して、越佐兩國に關係のある、しかも最も面白さうなものばかりを採り、自らも數篇を書加へて本書を作つたのであります。

最初は勿論、書物にするなどいふ考へは毛頭無かつたのでありましたが、讀んでゐるうちに非常な興味を覺えたので、此の金錢で買ひない貴重な材料を徒らに散佚させてしまふのは甚だ惜しい事だと考へて、起稿者諸君の愉快なる賛同を得、始めて活

字にすることを企てたのであります。

そこで、私はまづ選り出した材料に一通り筆を入れ、それを清書して纏める積りてありましたが、さて其の添削して清書したのを見ると、どうも木に竹を接いだやうなところや、玉石混淆の個所が多くて熟したものになつてゐなかつたのであります。そこで不本意ながら止むを得ず、生徒諸君の筆になつたものを土臺とし、もとの妙味と手振りとを成るべく毀さぬやうにして、文章だけを新たにしたりやうなものであります。勿論、原作に可なり筆を入れて用ゐたといふ例外もありましたし、原作の一部分をそつくり其のまゝ用ゐたのもありましたが、すべて原作の事實は尠しも私意を以て猥りに改竄、加減したものはありません。

それから、本書に收めた傳説の歴史上地理上の事實の穿鑿は致しませんでした。それは、さういふ方面の考證は私に不可能の事でもあり、又巷間傳つてゐるまゝの初心な理窟を交へない姿を記すことが、傳説本來の妙味を發揮する所以だと考へたからであります。

文體は概ね原作によつて「だ」「である」「です」「であります」式を雜へてゐます。それは、さうして置く方が却つて讀者諸君に倦怠といふ御迷惑をかけないでよからうかと思つたからであります。

それから本書の愛讀者諸君の中に、若し書中の傳説に關する事實相違の點や地名、人名の讀み違ひや文字の違ひ等についてお心づきの點がありましたら、どうぞ御教示の御手數を願ひます。

私は終りに臨んで左記

- 長谷川 謙一君(生きて歸らぬ山)。
- 内山 善治君(玉屋の椿)。
- 鈴木 藤吉君(夢を買ふ話)。
- 佐野 一郎君(鏡が池)。
- 込田 健夫君(百間堤)。
- 須藤 巖君(一本松)。
- 田中 秀雄君(音羽の池)。
- 風間 清君(白蛇)。
- 石坂 祥二君(守門獄の天狗)。
- 金山 良平君(お辨の松)。
- 小林 正文君(黒姫山)。
- 小林 博君(野邊塚)。

- 平山 道男君(加治山)。
  - 山崎 正平君(おいよ)。
  - 瀧澤 篤三郎君(黄金の神像)。
  - 大森 正路君(折峠)。
  - 伊東 多三郎君(源内婆が池)。
  - 木村 武雄君(白狗碑)。
  - 牛木 公平君(雲洞庵血染の袈裟)。
  - 高橋 榮一君(五智五如來御利生記)。
  - 寒川 道夫君(五百年橋)。
  - 廣田 博君(化杉)。
  - 小林 茂君(八石山)。
  - 砂川 旬一君(關山村毛塚の由來)。
  - 小島 勝太郎君(三正の蛇)。
  - 堀田 武次郎君(三枚の鱗)。
- 等の諸君に向つて厚くお禮を申します。本書の成り立つたのは全く諸君のお蔭であります。

大正十三年六月十三日

石原 亨

夢を買ふ話 目次

生きて歸らぬ山.....	五
二つの髑髏.....	二七
玉屋の椿.....	四三
夢を買ふ話.....	五五
鏡が池.....	六七
百間堤.....	七五
金佛様が飴を嘗めたといふ話.....	八五
あけさ.....	九五
一本松.....	一〇五
音羽の池.....	一一三
白蛇.....	一二七
守門嶽の天狗.....	一三三

お辨の松	一四一
黒姫山	一四九
野邊塚	一六三
加治山	一六九
かたがり松	一七七
あゝいよ	一八五
豪力長兵衛	一九五
黄金の神像	二〇三
折峠	二一一
源内婆が池	二二七
白狗碑	二三三
馬鹿な兄	二四七
虹は地獄の鍋の鉦である	二五七

雲洞庵血染の袈裟	二六三
五智五如来御利生記	二七五
五百年橋	二八七
化杉	二九五
八石山	三〇五
關山村毛塚の由來	三一
三疋の蛇	三二五
三枚の鱗	三三一
貂石	三四三

夢を買ふ話

石原 亨著





生きて歸らぬ山

人々が未だ鶏の聲に目をさまして、盈つる月、虧くる月に日並を知つた、それは遠い昔の世のこととあります。

其の頃、此の越後の國一圓は渺茫として際涯しも知らぬ大海原であつて、其の千尋の底には暗礁のやうに大きな一つの法螺貝が棲んでゐました。それは幾百年の壽命を保つたか判らない程劫を経たもので、悉く大天地おほあめつちの秘密の術を會得してゐましたからすこぶる暴虐な振舞が多く、少しでも己の意に満たないことがあると忽ち雲を呼び風を起し、地を震はし海嘯を起して、さながら魔神のやうに暴れまはるのであります。

怒つたのは鯨と鱧とでありました。此のあたり憚らぬ狂暴な法螺貝を其のまゝ捨て置いては自分達の威信に拘はるといふので、窃かに謀議を凝し、或る月の暗い晩、其の眷族を擧つて不意に法螺貝を襲撃しました。

ところが、神通自在な法螺貝は早くも之を知つて其の計略の裏をかいたので、鯨と鱧との全軍は散々に打ち破られ、屍は海上を一面に蓋したやうに覆うたのでありませんた。

勝ち誇つた法螺貝の暴虐は、それ以來一層募つて行きました。鯨と鱧とは無念の齒がみをして其の後幾度となく復讐を企てたのでありましたが、毎に惨敗の恥辱を重ねて多くの眷族を殆んど失ひ盡し、復、立つことの出来ないやうになつてしまひました。

法螺貝は常に鐵壁のやうに堅牢な貝の城廓の中に立籠つて、さながら海の暴君のやうに傲然と構へ、其の秘密の術を以て逃げ散る大小の魚族を日に幾百となく吸ひ取つては、其の貪婪飽くことない口腹の慾を充してゐたのでありました。

## 二

天地は小歇みなく變遷流轉しました。

星は移り、物は變つて、多くの年代が経過しました。すると、いつの間にやら大草原は渚の方から次第々々に陸地に變り始めてゐました。

魚族は水に随ひ、淵を慕うて沖へ沖へと移つて行きました。海水は日一日と沖へ引き去りました。併し法螺貝許りは其の並びない己の偉力を恃んで、日夜王者の夢に耽りつゝ、此の地變を目の前に控へながら少しも其の位置を變へようとはしなかつたのでありました。

或る秋の日のことでありました。

其の日は黄味を帯びて輪廓の朧になつた太陽の弱い光が虚空に充ち充ちて、生温く腥いやうな風が海上を吹いてゐました。

恰度、午下りの頃でありました。

突然、地軸が碎けるかと思はれるやうな大地震と共に、物凄の大風が吹き起つて、海水はさながら盪の水をゆするやうに奔騰し衝撃して、海上には山のやうな大波が立ち騒ぎました。

無数の魚族は此の不意の自然の怒りに遭うて生きた心地もなく、周章狼狽して海底の淵や岩蔭に潛伏してしまひました。すると雷のやうな烈しい音が海上に起つて、大海原の水は瞬く間にさつと數里の沖合に引き、其の跡には忽ち地がむくくと膨れ上つて、見る間に多くの大山小山が出来上りました。

あつと驚いた法螺貝が始めて氣がついた時には、彼は既にとある小山の天邊に押し上げられてゐたのでありました。

烈火の如く憤つた法螺貝は直ちに洪水を起し地を震はし、或は雲を呼び風を起し、躍起となつて此の造化の難を海底に避けようと、藻搔きに藻搔いたのでありますが、既に水を離れた彼は如何に其の秘術を盡しても到底日頃の偉力を十分に發揮すること

が出来なかつたのでありました。其の上、彼は自ら起した風のために吹き飛ばされた砂礫によつて、次第々に土中に埋められ沈められ、遂には地上から全く其の影を没し去り、あはれ萬年の齡も愈々終焉に近づいたかと思はれました。

大山小山の上には幾つかの平和な春秋が來往しました。

天は暖め、地は養ひ、五風十雨度に叶ひ、大山小山の上には先づ草が生え、それから木が茂り、林となり、森となり、やがて虫鳴き、鳥歌ひ、獸が走るやうになりました。

ところが不思議なことには、法螺貝の埋没した小山の其の草蒸す小暗い木蔭に、いつともなく地獄の入口のやうな眞暗な穴が明いて、其穴の底からは時々偉大な何ものかの唸るやうな音が聞えるのでありました。其の音に怯えてか、穴の周圍には近づく鳥獸もなく、縁に立つ木草は悉く穴に向つて靡き伏してゐたのでありました。

ある天氣のよい秋の一日のことでありました。

一人の樵夫が斧と鋸とを持つて、其の大穴のある小山に登つて行きました。嘗て斧斤の這入つたことのない、汚されない山でありましたから、奥深く分け入るに随つて、山膚は朽木や枯葉や雜草に埋められて、濕つた微臭い香が晝なほ小暗い木蔭に漂ひ、日の光を洩さぬ大木は鬱蒼たる枝を交へて、太い蔦蘿は大蛇のやうに絡み垂れ、自然に倒れて腐朽しかけた幾百年の老木や、雪に裂け風に折れた新しい大木は或は谷に横はり、或は溪流を堰き、或は行手を塞いで、さながら原始的な風光でありました。

微かに鳥の聲や水の音が聞えました。

名も知らぬ獸が此の稀有な珍客に驚き走りましました。

境の幽邃は多分の神秘的な色彩を含んで、荆棘を分けながら落葉枯葉を蹈んで行く樵夫の蚤音は、さながら太古の靜寂の中に自然の囁きを聞くやうでありました。

嘗て人跡を印したことのない山でありますから、良木は選り取り見取り、好き勝手なものに到る處に澤山ありました。あれかこれかと物色してゐた樵夫は忽ち己の望に

叶ふ一本の大木を見つけたので北叟笑みながら、兩手で斧を堅く握りしめ、渾身の力を籠めて、

「發止」と、ばかり、其の根方に開關以來の第一撃を下したのでありました。

「丁、丁。丁、丁、丁」

力強い斧の音は奥深い森に木靈こたまして峰の靜寂を破りました。大木は樵夫が懸命の努力に刻一刻と其の壽命を縮められて、臙て倒れるばかりになりました。

これに氣を得た樵夫は、

「えいッ」と、最後の一撃を下しました。

すると大木は、みり、みり、みりと凄慘な恨めし氣な音を立て、其の道にあたる大枝小枝を折り裂きながら、地響き立て、地に倒れました。

樵夫は快心の微笑を洩して、汗を拭ひながら、暫く倒れた大木をさも満足げに眺めてゐましたが、漸く疲勞を覺えたので、傍の草の上に腰を下して煙草を吸ひ始めました。すると妙に下腹に力がなくなつてゐて、煙草が頭の髓にまで沁みるので、

「腹がへつたんだ。食事でもしようか」と思うてゐると、いつか酔うたやうになつて樵夫はぼんやり虚空に消える淡紫の煙の行方を追うてゐましたが、聽て涸ぐやうな格好で、ふら／＼と立ち上り、蹣跚として前へ前へと歩き出しました。

數間先には彼の地獄の入口のやうな大穴が生きた魔の口を開いて待つてゐるではありませんか。

夢遊病者のやうになつて其の穴の縁に立つた樵夫は「あぶない」と、思ふ間に、目に見えない偉大な力に突きめされたやうに、眞暗な奈落の底に引きこまれたのでありません。

程過て關の底から斷末魔の悲鳴が微かに聞えて來ましたが、それもすぐ歌んで、あとはまたもとの静寂にかへり、小鳥がちちちと枝から枝を飛んでゐました。

黄昏が薄つて來ました。夕陽は全山に赤い光の洪水を浴せかけました。蛇が草の上を走るやうな音立て、風が梢を渡りました。色づいた木の葉がひら／＼と寒げに散りました。伐り倒された大木は無氣味な姿を長々と夕關の底に横たへ、白い伐り口は

何事かを暗示してゐるやうてありました。かうして人里離れた奥深い森は、此の神秘的な椿事を包んで、音もなく靜かに靜かに夜の帷に入りました。

## 四

樵夫の家では其の日に限つて主人の歸りが遅いので、家族は心配しながら交る／＼門口に出て山の方を見てゐたのでありましたが、遂にそれらしい姿も見えないで夜になつてしまひました。

「何か變事があつたに違ひない」と、樵夫の家では村の人達を頼み、夜を徹して共々山の中を隈なく搜したのでありましたが、つひに其の姿を見出すことが出来なかつたのでありました。

家族は泣く／＼樵夫が家を出た日を命日として、懇ろに其の後を弔つてゐました。

年が改つて春の雪消の時節になりました。

其の樵夫の村に血氣な二人の樵夫がありました。去年の秋の出来事に怯えて、それきり誰も魔の穴の山に行かうとするものゝ無いのを奇貨として、また懲りずまに一儲けしようとして、或る日ひそかに連れ立つて其の山に上つて行きました。ところが其の二人も行つたきり永久に歸りませんでした。

「これは屹度、何れも山に棲む妖怪變化の仕業に相違ない」と、村人は考へました。去年のことといひ、又今のことと云ひ、なるほど二つの椿事が同じものゝ手によつてなされたと考へるのに慥しも無理はありません。

「二人の遭難は既に終つてしまつたことで已むを得ぬとしても、かうして貴い人命を三つも奪られては其の儘捨て置くわけにはならぬ。これは飽くまで其の妖怪變化を退治して、禍を根絶せねばならない」といふ輿論が熾んに湧き起つたので、村では決死の若者數十名を選抜して搜索隊を組織し、行方不明になつた三人の先途を見届けさせることになりました。

愈々其の日になると、搜索隊は各自獲物を携へ魔の穴の山に登つて行きました。恰度、其の日の八つ時分でありました。

搜索隊は頂に近い藪の中に、光る二挺の斧と錆びた一挺の斧と鋸とを發見しました。「それ、此の邊が怪しい」と、一隊は急に緊張して八方に氣を配りながら、あたりを隈なく探りましたところが、それから何れも十數間隔つて伐り倒されてゐる三本の大木が見つかりました。

それによつて三人の樵夫は何れもそこで木を伐つたことだけはもう疑ふ餘地が無くなりました。

漸く搜索の端緒を握つた一隊は雀躍して喜びました。ところがそれはほんの糠悦びで、それからいくら捜しても死骸はあるか彼等の身につけたもの何一つ遂に見出し得なかつたので、木を伐つてからの三人の行動がまた皆目判らなくなつたのでありました。

「假令、妖怪變化の餌食になつたにしても骨の一片位は残つてゐさうなものである

……」。

捜し厭あぐむだ人々は不可解の腕を組み、思案の小首を傾けたのでありました。

「穴がある!!」

突然、大きな叫び聲が上りました。

一隊の人々は一齊に聲の方に駆けつけました。其處は彼の恐しい地獄の入口のやうに眞闇な底知れぬ大穴が魔の口を開けてゐるではありませんか。一同は穴の縁よちに立つて互に言葉もなく見えぬ底を覗きこみながら、三人の死と其の穴とを結びつけて色々の想像を逞しうしてゐました。すると何れも申し合せたやうに急に臉が重くなり、あたりが朦朧と霞んで、次第に現實を離れて夢幻の境に入るやうな気分になりました。

一陣の風が颯と梢を渡りました。

はつと氣がついた一同は思はず戰慄して冷汗を流しました。驚くも無理はない。一同は何れも其の穴に吸ひ寄せられて、まさかのめりこまんばかりに身を屈かためてゐたのでありました。陥つたら百年目と、一同は震へる足に満身の力をこめ、手に草を掴ん

て辛うじてふみ止まり危難を免れたのでありましたが、其の刹那に電光のやうに萬事の解決を得たのでありました。

「これだ、これだ。三人は此の穴に呑まれたのだ」。

事實の真相を突きとめた捜索隊は喜び勇んで、何れも無事に夜に入つてから村に歸つて來ました。

話は疾風のやうに傳つて忽ち全村に擴まりました。

「魔の穴、魔の穴、世にも恐しい魔の穴である。穴の底には一体何ものが潜んでゐるのであらう」と、村人は各々當推量して恐しがつてゐました。

村に一人の負嫌ひの獵夫がありました。

村人が寄ると觸るといかにも大袈裟に其の魔の穴の怪を話し合うては子供のやうに怯おそえてゐるのが可笑しくも亦馬鹿らしかつたので、其の話が出ると妙に反感を起し、態と「ふまん」と鼻の先でせ、ら笑つてゐました。



「穴が人を呑む？何の阿呆らしい。穴に呑まれたと見せかけて——うまいや——可愛い阿魔つ子の手でも取つて、疾つくの昔にどこかの空へ突つ走つてゐやがるんだ。餓鬼の癖に巫座戯てゐやがら……よし、さういふ處でなければ思ふ存分の獲物が得られない。何の妖怪變化が出るものか。出たら只の一矢で射とめて、恐れてゐる村人の鼻を明してくれろ」と、或る日のこと、獵夫は人々が強つて止めるのを振り切つて、また魔の穴の山に登つて行きましたが、それも亦永久に歸りませんでした。

## 五

またしても尊い人命を奪られたのであります。もうかうなつては如何にそれが魔物の所爲だとは云へながら、村人は黙つて見てゐる譯には行かなくなりました。そこで村の古老達が集つて幾日も鳩首評議の結果、遂に其の魔の穴を掘り覆して底の怪物を退治することに決つたのであります。

## 怪物退治！

村内は急にざはめき渡りました。

勇み立つて腕を撫するものもあり、眉を蹙めて心配するものもあり、一村は不安な活氣が漲つて忽ち上を下への大騒動となりました。

やがて總ての準備が整うて、愈々明日は怪物退治だといふ前の晩になりました。若者たちは明日の勇しい活動を胸に描いて心を躍らせながら寝につきました。老人たちは眠られぬ夜を後の祟りのないやうに、明日の大仕事が首尾よく成功するやうにと、一晩中神佛に禱り續けました。

鈍い星明りの夜は深々と更けて、妖氣の漂ふやうな生温い蛙のだみ聲も何か不祥事の起る前兆の如く、山も川も木も草も田も畑も、皆その赤裸々な本性をあらはして、或は相叫び相近づき相角し相浮れて、無氣味の夜を跳梁してゐるやうでありました。

恰度、一村は異變の起る前に來る物凄い寂寞に取り巻かれてゐるやうな丑三つ頃、すうと地上に青い光が流れたかと思ふと、薄暗い影がいくつも長く走つて、月が山の

端にひよつこり上つて來ました。すると怪しの黒雲が俄かに月の兩方から湧き起つて、見る間に月を苛むやうにかくし、忽ち空一面に擴つて天地は黑白も分かぬ闇夜となり、ぼつりくと大粒の雨を落して來ました。

翌朝になりました。

夜來の雨は此の時車軸を流す猛雨となつて瀧のやうな音を立て、それに風さへ加はつて百獸の吼えるが如く、愈々世の終りかと思はれる程の大暴れとなつてゐました。

「洪水にでもならなければよいが……」

「魔の穴の祟りぢやないだらうか……」などと、老人達は皆胸を痛め、家々は何れも戸を鎖して此の自然の暴虐の中にさながら「死の村」の姿を横へてゐました。

二日、三日、四日、暴風雨は依然として歇みません。随つて怪物退治は一時中止の已むなきに至りました。

未曾有の暴風雨が永びくにつれて、朴直な村人は次第に迷信を起して此の企てを後

悔し、續發する奇怪な噂に益々神経を尖らして各自は一心に身の安泰を神佛に祈りながら其の成り行きを恐しがるやうになりました。

或る日の午後のことでありました。

俄然、海嘯のやうな凄じい音が魔の穴の山の方から起りました。

怖氣づいてゐた村人は皆彈かれたやうに戶外に飛び出しました。見れば魔の穴の山とそれに並んだ山との間に一大激流が現出して、しかもそれが猛烈な勢で田をふみしだき野をふみにじつて、次第に此の村に迫つて來るではありませんか。村人は腰も抜かさんばかりに驚いて悲鳴を擧げ、家を捨て、調度を捨て、洪水のやうな濁流に膝を没して猛雨の中を無我夢中で山の上に逃げ上りました。

折柄「ブーウ、ブーウ、ブーウ」と、小山のやうな法螺貝が世にも恐しい進軍の閨の聲をあげて、遙かの激流の眞只中に乗つて攻め寄せてくるではありませんか。村人は全く生きた心地もありませんでした。

既に幾百年の昔に於て、其の萬年の齡を終へたとばかり思つてゐた法螺貝は、其の永

い間を地中深く埋没して飢餓と壓迫とに苦しみながらも、未だに命数が盡きないでゐて、彼の魔の大穴から常に多くの人畜を呑んでゐたのでありました。

ところが、愈々村人の手によつて魔の大穴が掘り覆されることになつたので、早くも之を知つた法螺貝は、

「掘り覆されては百年目」と、さてこそ旬日にあまる猛雨を降らして多量の水を貯へ、今それに乗つて穴を出たのでありました。

「ブーウ、ブーウ、ブーウ」

関の聲は益々迫つて來ます。激流は滔々として天に漲り、一瀉千里の勢で道にあたるすべてのものを其の鋭い齒で噛み碎きながら、既に村近くまで突進して來たてはありませんか。一村の運命は風前の燈であります。山上に避難してゐた村人は何れも息を呑み、手に汗を握りました。

萬事畢る。

あはや、一村は微塵に粉碎されて烏有に歸したかと思はれた刹那、不思議や激流は

急に進路を變へて左折し、東南の山峽に向つて殺到したのでありました。

村人はほつと蘇生の思ひをして子供のやうに喜びました。

激流の進路にあたつて恰度一つの小山がありました。

忽ち之に衝突した激流は耳を聳する轟然たる音響を發して、其の小山を數百間の外に跳ね飛ばし「ブーウ、ブーウ、ブーウ」と、進軍の関の聲勇ましく、遂に全く山間に其の影を没し去つたのでありました。

すると、さしもの猛雨も、からりと霽れ、激流の蹂躪した跡も嘘のやうに消えて、天地はまたもとの麗かな春日和となり、草木悦び禽鳥和鳴し、人は始めて愁眉を開いたのでありました。

始終實に夢のやうであつた此の不可思議な椿事も、かくて漸く大團圓を告げたのでありました。

魔の穴のあつた山は長岡近郊栖吉の山らしく、山間に影を没した激流は、進み進んで遂に日本海に落ち、法螺貝は復もとの棲處すまがに歸つたのでありました。

其の激流の跡が色々にかはつて今の信濃川になつたのだと云はれてゐます。

當時の村は矢張長岡附近に位してゐたものらしく、激流に跳ね飛された小山は今の三貫と稱する處で、斷崖の下は常に潺湲清き音を繞して四時に美しく、殊に夏は牖外の流螢水を照して涼しく、闇に亂れて青い處であります。

かうして法螺貝が再び海に入つたので、日本海には古來鯨と鱧とは極めて尠く、無数の魚族は皆怖れて北方に逃げ去つたので、それと樺太附近が世界の三大漁場の一つとなつたに違ひないのであります。

栖吉の山と云ひ、信濃川と云ひ、何れもかゝる奇しき口碑を秘めて、今さりげなき平和の姿を續けてゐます。

世の中が未だ愚と云ふ徳を守つてゐて、現今のやうに互に軋きしみ合はない頃のことであつた。

其の頃、三島郡野積村に一人の漁夫が住んでゐた。女房に早く死に別れて、忘れ形見の悴を頼りに、毎日海に網を打つて細い煙を立てて居た。

或る日のことであつた。

漁夫はいつもの通り魚籠びくを腰にさげ、網を片手に海邊に出た。

其の日は空が蒼々と晴れ渡つて、日はどこまでも眩しいばかりに輝き、紺青の海面は白銀の細鱗を疊んで濃やかに揺れ動き、目路の際涯は遠く遠く煙つたやうに霞んで、淡彩一抹の佐渡が島は、薄藍色の柔い夢に包まれて眠つてゐた。

そして日影が浪の底にまで浸み入つたかと思はれる程暖かに見える磯邊には、磯馴の松が千歳の色を妙なる枝に誇り、鬼斧に任せた巖窟には、小波が憚るやうに囁いてゐた。

ぼかぼかと蒸れるやうな暖かさに酔心地になつた漁夫は、霞みながら渚に出て来て、やがて最初の罾をさつと打つた。何氣なく手繰り寄せて罾を上げた漁夫は、思はず目が眩んで「あつ」と、驚かすにはゐられなかつた。驚くも無理は無い。罾の中には尺に餘る一尾の鯛が、燦爛たる金光をあたりに撒き散しながら、潑刺として躍つてゐるではないか。驚喜した漁夫は、躍りかかつて件の鯛を手早く引き掴み、魚籠の中に入れてやうとした。するとこれはまた不思議。金色の鯛は忽ち夢のやうに消えて、漁夫の手には一疋の氣味のわるい蛇が残つた。そればかりか、其の蛇は鎌首を擡げて、

「私を助けてやつて下さい。さうすれば屹度、あなたを幸福にして上げます」と、怖々として云ふてはないか。

漁夫は魅せられたやうになつて暫く呆然としてゐたが、何となく不氣味な豫感に襲はれて、蛇の云ふが儘に海に放つてやつた。

さうすると其の蛇は、またもとの金色の鯛になつて、燦爛たる金光を水面に撒き散しながら、尾鰭をひらひら動かして、さも嬉し氣に沖の方へ遊いで行つて、臆て見えなくなつた。

後見送つてゐた漁夫は、自ら狂つたのではないかと心配した。現在、目前の出來事ながら、漁夫は幻を見たのではないかと疑はずには居られなかつた。そして我と我が精神状態を危ぶみながら、宙に浮いてゐるやうな氣分で、空虚な体軀を運ばせて、歩くともなく海に沿うて歩き出した。

「私を助けてやつて下さい。さうすれば屹度あなたを幸福にして上げます」  
考へれば考へる程愈々分らなくなつた。

煩はしくなつて來たので、漁夫は考へることをやめて、また場所を改めて網を打つて見た。と、今度は打つ網も打つ網も常にかはつて澤山の魚がかつた。ほくほく喜んだ漁夫は、其の日は魚籠に這入り切れぬ程の魚を捕つて家に歸つた。それからと云ふものは毎日々々澤山の魚がとれた。他の漁夫達が一疋も捕れんて苦んでゐる時でも、また暴風雨で舟を出すことさへ出來ないやうな時でも、其の漁夫が網を下しさへすれば、いつでも網一杯に魚が捕れないことはなかつた。

金廻りのよくなつた漁夫は、また陸でも色々な事を企てた。それがまた、する事なす事何んでもとんとん拍子に甘くあつて、漁夫は忽ちの中に近郷に並びぬ俄長者になつてしまつた。

そこで漁夫は、今迄の掘立小屋同然の穢い家を壊して立派な邸宅を構へた。幾戸前もの土藏を建て連ねて、唐の大和の珍らしい道具類を山と買ひ集めた。莊麗な庭園を築いて、數十人の婢僕を驅使した。身には綾羅を着飾り、口は山海の珍味に飽きてゐた。

二

併し、不思議なことには、どうかした機にあの金色の鯛を思ひ出すと、其の鯛を食つて見たい慾念が盛んに湧き起つて堪へられなかつた。「これではならぬ」と、漁夫はぢつと我慢に我慢を重ねてゐたのであるが、終には矢も楯もたまらぬ程食ひたくなつて來た。何一つ意の儘にならない事のない漁夫は、其の頃既に高慢の心が萌してゐた。或る日のことである。

「何程のことやあらん」と、婢僕の目を忍んで網を取り出した漁夫は、許さなければならぬ筈のあの金色の鯛にたいして、違約の後目痛い心を無理に抑へつけながら、最初、金色の鯛を捕つた其の場所に出かけて行つた。

潜に立つた漁夫は水面を眺めながら、それでも幾度か躊躇してゐたが、いつの間にやら夢のやうな氣分になつて、操られるやうにさつと網を打つた。

すると不思議なことにはまた最初の金色の鯛が繫つて来た。

漁夫は矢庭に捕へて魚籠に入れようとすると、また一疋の蛇に變つて、

「助けて下さい。其の代りにあなたの財産を二倍にしてあげます」と、云つた。

漁夫はまた他愛もなく惚々しくなつて、其の云ふ儘に海に放してやつた。

さうすると今度は思はぬ事に金儲けが続いて、僅かの中に漁夫の財産は忽ち二倍になつた。

さうなると、漁夫はまた暫く忘れてゐたその金色の鯛が思ひ出されて、食ひたくて食ひたくて堪らなくなつた。

金の威光で總てを意の儘に振舞つてゐる漁夫は、もう其の頃は頗る我儘増長して、傍若無人の振舞が多かつた。我慢が仕切れなくなつた漁夫は、傲慢な捨鉢な肝癢を起して、また最初金色の鯛を捕つた海岸に行つた。

「何程のことやあらん」と、今度は殆んど何の躊躇もなくさつと網を打つた。するとまた最初の金色の鯛が繫つて来た。

今度こそはと、目をつぶつて耳を塞いだ漁夫は、鯛がびちびち跳ねながら、何か大聲で喚き叫ぶのもかまはずに、早速魚籠の中に叩き込んで窈かに家に持ち歸つた。

夜になつた。

漁夫は召使共の寝鎮るを候ひ、庖丁片手に件の魚籠をあけて見た。もう疾うに死んでゐるだらうと思つてゐた鯛は、燦爛たる金光を闇に放つて、びちびち跳ねながら、

「助けてくれ、助けてくれ」と悲鳴をあげた。

びつくりした漁夫は、人に聞かれたら一大事と、遮二無二鯛の口を鷺掴みにして、素早く腹を割き、臟腑を攫み出して、串にさして火に焼いた。

「かうして仕舞へばもう大丈夫」

漁夫は一人手に酒の痛をして、獨酌で鯛を肴にちびりちびり吞み始めた。

鯛の美味なことは何に譬へるものもなかつた。百味に飽きた漁夫の口も、こればかりは一口毎に舌がとけるかと思はれるばかりであつた。世にも妙なる味に思はず盃の



敷を重ねた漁夫は、やがて陶然と酔心地になつて横になると、我知らず大鼾をかいて寝入つてしまつた。

ころころ、ころころと、蟋蟀が床下で鳴いてゐた。

さやさやと夜嵐が梢を渡つた。ぶら——と何處かて障子の破れ目が泣いた。かさ、かさ、かさと大きな木の葉が窓の外に墜ちた。

みしん、みしんと家が揺れ出した。ぎい、ぎいと柱が鳴つた。物の落ちて割れる音が四方に起つた。

はつと驚いて漁夫は目を覺した。

其の瞬間である。

みり、みりみりと耳も裂けるばかりの物凄い大音響を發して、不思議や、屋根が虚空に飛んだ。そして、

「あつ」と仰天してゐる漁夫を、さながら擲擲ふ如く大空へ舞ひ上つた。續いて梁が

飛んだ。桁が飛んだ。柱が飛んだ。壘が飛んだ。瞬く間にかうして皆欠け失せて、さしも宏大な建物も忽ち烏有に歸してしまつた。數十人の婢僕も、金に飽かして集めた珍奇な道具類も皆夢のやうに消えた。そればかりか漁夫が今まで着て居た立派な衣服までが、いつの間にかやらのとの襪褌に變り、昔の破れ小屋が只一つ目前に出來てゐた。

呆然として自失した漁夫は、驚き痴れて立つことが出來なかつた。口や手を動かすばかりで物も云ひ得なかつた。あたりはさるで大風の吹いた後のやうに、荒涼落莫たる光景を呈してゐた。

漸く物心ついた漁夫は、

「ああ、金色の鯛を食はなければよかつた」と、後悔の念が泉のやうに湧き起つた。それと同時に、鯛に負うた違約の罪に對する觀面の報を當然受けなければならぬのが、身慄ひする程恐しくなつた。

漁夫は雀の巢のやうになつた髪を掻き搦つて、苛々しく軀軀を打ち振り、自責の念

が噛み切つた唇には血を銜み、自團駄踏んで、大聲あげて泣き出した。

三

一夜のうちに憔悴して骨と皮ばかりになつた漁夫は、さながら骸骨が踊るやうな格好で、ひよろひよろ歩きながら、翌日からまたもとのやうに毎日海に網を打たなければならなかつた。併し、それからといふものは、いくら打つても金色の鯛はあるか、雑魚一疋すらかからなかつた。漁夫はすぐ其の日から糊口に窮した。

健氣な倅は山に入り川を漁り、或は勞役に雇はれて、父子二人の露命を繋いだ。或る朝の事であつた。

其の日は天地が灰色に曇んで、波頭が白く破れて濁つて一面に泡立ち騒いでゐる海面からは、うそ寒い鹽風が濱菜萁の枝に砂を吹きつけてゐた。

倅は渚に立つて薪の代りにしようと、波に漂ひ寄る木屑を拾ひ集めてゐた。

其の時である。

波打際に白いものが漂うて來た。何てあらうと拾ひ上げて見ると、それは文字のある一枚の板片であつた。

「此の道を山に向つて行け。そして最初の岐れ道を右に曲れ。暫くして道傍に一本の大木を見出すであらう。その根下を掘つて見ろ」と、書いてあつた。

珍しいものが見つかつたと思つて、倅はそれを家に持ち歸つて父の漁夫に見せた。

「何が出るだらう」

倅は好奇の腫を輝かして訊ねた。

「屹度、金でも埋つて居るんだらう。早く行つて掘つて見ろ」

父の漁夫が不機嫌に答へた。

倅は鍬を擔いで、板に書いてある通りに飛んで行つた。果して道傍には幾抱もある一本の大木が際々しく紅葉した雑木に交つて立つてゐた。あたりをうかがひ急いで根下を掘ると一つの小箱が出た。箱の蓋に、

「此の道を南に行け。そして最初の岐れ道を左に曲れ。一つの池を見出すであらう。此の箱を其の中に捨てる」と、書いてあつた。

「金でもないらしい。はて、何が這入つてゐるんだらう」

悴は蓋を取つて見た。中には魚の頭の骨と、人間の頭の骨とが這入つてゐた。

悴は急に氣味わるく、恐しくなつた。虫が知らすか、父の漁夫の事が矢鱈に心配で堪らなくなつたので、書いてある通りの池に小箱を投げ込んで、宙を飛んで家に歸つて來た。

家には父の漁夫の影さへなかつた。

心細くて泣き出したいやうになつた悴は、彼方此方と父の漁夫を捜し廻つた。逢ふ人毎に尋ねても見たが、誰も其の行方を知つてゐる者はなかつた。

夕暮が來た。

悴は尋ね疲れて、最初金色の鯛を捕つた濱邊に彷徨さまよひ出た。朝から一食も取らなくて、歩く力も無くなつてゐた。

黄昏の波打際に着物と下駄とが見えた。よくよく見ると、それは紛ふ方ない父の漁夫の今朝まで身につけてゐたものであつた。

「やれ、禧しや、父はここにか」と

「お父さん、お父さん」

悴は聲を限りに呼びつづけた。

いくら呼んでも返事はなかつた。

悴は渚を走り、丘に上り、岩に攀ぢ、淵を探つた。併し父の漁夫の姿は其の何處にも見出されなかつた。

夕闇は逼つて來た。

極度の悲哀と飢餓とにさいなまれた可憐な小さな心は、到頭狂亂した。それからといふものは、悴は晝夜の區別なく、毎日海邊を行きつ戻りつしては、父の名を連呼しては走るやうになつた。飢ゑれば虫を食ひ、草を食つた。疲れれば其の儘、人の軒にも濱にも寝た。

しかし、父の漁夫の姿は、永久に再び悴の兩眼に映じなかつたのである。



玉屋の椿

米山甚句て名高い米山々脈の日本海に盡きたる處が福浦の絶景であります。其の絶景の東端に鯨波といふ漁村があります。此處は海陸の眺めを兼ねて、北陸屈指の游泳場として、また避暑地として、普く其の名を知られてゐます。

近海には米山々脈の根が碧く漫々と湛へた海波の中に隠れ伏して、潮激すれば水面に時ならぬ萬朶の花を咲かせ、山脚は海にせまりて千丈の絶壁を削れば、怒濤は岩壁を噛みて萬尋の深潭を穿ち、蟠龍虎踞の奇巖は到る處に造化の巧な斧の跡を誇つてゐます。

晴れ渡れば、絶壁の上には波のやうに起伏する前山を隔て、米山の秀峰を半空に望み、下には水光激漑たる日本海に浮ぶ青螺の佐渡が島を水天髣髴の間に見渡すことが

出來ます。

春は爛漫たる紅白の花に彩られ、夏は滴る木々の翠に潤され、秋は燃え立つ紅葉を以て飾られ、冬は皚々たる白雪に包まれて、四季折々の眺め見あかぬ形勝の地であります。

今は昔、其のあたりに玉屋といふ長者がありました。

主人の名は徳兵衛といつて、海産物を商ふ大問屋でありました。小高い丘陵の上には巍然として建て並べられた邸宅は王侯の宮殿のやうで、其の中には金銀財寶が山のやうに積んでありました。着るには綾羅の麗しきがあり、食ふには山海の珍味があり、使ふには數十人の婢僕があり、商ふには渚を埋めた幾十の大船小船があり、眺むるには山海の雄大崇高の景を兼ねて、たとへば天下の富貴を皆此處に集めたかと思はれるばかりでありました。

得意の絶頂にある徳兵衛は、且ましかたには朝日の光に送られて靄の中に消え行く我が幾十艘の艦聲を枕の下に聞き、暮には夕陽に迎へられて追分の絶調高く歌ひつゝ歸る所有

の幾十の白帆を高殿たかどのの欄干に靠れて眺め入つては、いつも限りない己の富に思はず驕傲の微笑を洩してゐたのでありました。

併し、徳兵衛も親譲りの長者ではなかつたのであります。彼は未だ肩揚げのとれないう頃から、殆ど寝る目もねずに、身を粉にして懸命に働きました。遊びたい盛りを一入月花に背いて、未來の成功を夢見つゝ、幾多の計畫を樹て、不斷の努力を續けたのであります。其の努力は無駄ではありませんでした。彼が壯年に及ぶ頃、幾多の計畫は悉く圖に當つて着々其の功を奏し、財産はめきめき殖えて來ました。そして瞬く中に界限切つての分限者となり、長者よ、豪家よと謳はれるやうになりました。

初一念を貫いた彼は漸く一安心して、花のやうな女房を迎へました。玉のやうな子が出來ました。併し、さうなつても、彼は決して家の商賣を奉公人任せにばかりするやうなことはありませんでした。時を定めては幾戸前となく續く土藏の内外を見廻り、帳簿の出納や、船の出入りやを監視することを常に怠らなかつたのであります。

しかし、かうして何不足ないやうになつた徳兵衛にも、唯一つ身にあまる心配があ

りました。それは山と積まれた黄金白銀の置場所をどうしようといふ心配でありました。多くの人は金のないために苦しむものですが、彼は自ら山と積んだ金銀のために毎日悩まされてゐたのであります。床下に埋めるにしても、土藏の奥に隠すにしても、泥棒が破らぬとも限らぬ、下女下男も出入りする……あれにしようか、これにしようかと、色々考へて見ても、絶対に安心の出来るやうな隠し場所は容易に思ひあたらないかつたのであります。そこで、徳兵衛は行末のことをつくづく考へると、折角貯めた金銀も遠からず盗まれ誤魔化されて皆人手に渡つてしまふやうな氣がして、次第に夜の眠りは安さを得なくなりました。

或る時、ふと徳兵衛の頭に浮んだ事がありました。それは邸宅の裏手にある大きな竹藪でありました。

「これこそ屈竟の匿し場所である」と、彼は急に、からりと晴々とした安らかな氣持になつて、心密かに微笑んだのであります。或る暗い晩のことでありました。

徳兵衛は兼ねて用意して置いた幾つかの金箱を人知れず裏手の竹藪に持ち出ししました。そして四邊に氣を配りながら、其の中程に只一本ある椿の木の下に人知れず埋めてしまつたのであります。

重荷を下したやうに安心した徳兵衛は、やつと打ち寛いだ氣持に蘇つて、其の晩は久方振りにぐつぐつと安らかな眠りに落ちたのであります。

然し安心したのはほんの束の間でありました。

翌日になると、彼の安心には得體えたいの知れぬ不安の薄雲が懸つて來ました。それが段々と夕闇の色濃くなるやうに、或るさまじい輪廓を形造りながら彼の腦裡を往來するやうになりました。

「若しや、昨夜、金を埋めたのを誰か見てゐなかつたであらうか、若し見てゐた者があつたら折角の苦心も水泡に歸してしまふ……いや、そんなことはあるまい。殊にあの暗夜であつたから、よし、遠くて見てゐても何を埋めたか分る筈がない……それでも誰か竹でも伐りに這入つた拍子に、掘り返した土の跡を不審がつて掘つて見るや

うな事はなからうか……いや、それも枯葉を一面に被ひ冠せて置いたから、氣付かれる心配はあるまい。然し、よく昔話に、壺に入れて埋めた金が後になつて掘つて見たら一疋の蛙にかはつてゐたなどいふこともあるから、自分の金もそんなものに化けはしないだらうか……」

あゝならうか、かうならうかと、色々心配し出すと際限がなかつた。心配が心配を生んで、終には心配が味噌汁のやうに体内に煮染みこんで、それがため日夜懊惱して心を苛立ててゐました。

其の心の悩みはつひに彼をして俗にいふ氣の病に罹らせました。彼は次第に朝夕も進まぬやうになり、日一日と憔悴して、其の病苦に堪へられなくなりました。

家族は大いに心痛して醫者よ薬よと八方手を盡しましたが、何しろ人には其の原因のわからぬぶらぶら病氣なので、醫者も手の盡しやうがなく、誰の慰めも薩張り其の効験がありませんでした。

徳兵衛は日一日と益々氣が苛立つて、罪もない家族や奉公人に當り散しました。そ

れがためさしも賑かであつた長者の家も笑聲一つ洩れず、痛しい暗い影がはびこり、人々は日夜針の筵に坐る思ひで、大聲に物云ふのさへ遠慮するやうになりました。

そこで此の儘にして置いたら自他共に害ふばかりであるから、何とか善後策を講ぜねばならぬと、家族や親戚が鳩首凝議の結果、いつそ轉地でもしたらまた氣の晴れることもあらうかと、家族は徳兵衛に轉地療養をすゝめたのであります。

徳兵衛も其の方が却つて氣も紛れ、またよい思案も浮ばぬとも限らぬと思つたので、早速承知して、氣に入りの女中を一人連れて松の山温泉へ轉地療養に出かけたのであります。

温泉に到着した當座は仲々金の心配が彼の頭を離れなかつたのでありますが、流石に其の俗塵を離れた別世界の新鮮な空氣と、大地の底から湧き出る藥の熱泉とは、日に彼の心を爽かにし、彼の健康を恢復しました。

一月ばかり経た或る日のことでありました。

徳兵衛は何時もの通り湯に這入つて氣持よく打ち寛ぎながら、見晴らしのよい座敷



て女中に肩腰を揉ませておました。すると何處からともなく何ともいひぬよい聲で歌ふのが聞えて來ました。

「越後鯨波玉屋の椿、枝は白銀、葉は黄金」

歌つた人は何氣なく歌つたのでありませうが、それを聞いた徳兵衛は喪心する程驚きました。彼は直ぐに起き直つて聞耳立て、女中に歌の意味を尋ねました。

主人の心を知らぬ女中は、

「あれは玉屋の限りない富を謳つたのでありませう」と答へました。

しかし、徳兵衛の不安は刻一刻と意地悪く募りました。

居ても立つても居られなくなつた徳兵衛は、女中の宥め止める言葉を耳にもかけず、即座に早駕籠を仕立てさせて、眼の色かへて鯨波に馳せかへつたのであります。

自宅に歸りつくや否や、駕籠から飛び出した徳兵衛は驚き迎へた家族や奉公人を突き飛ばすやうにして、夢中になつて黄金を埋めた椿の木の下へ一目散に走つて行きました。見ればこは如何。まさかと思つてゐた椿は歌の文句その儘に枝は白銀に、葉は

黄金に化して、燦然と輝いてゐるではありませんか。

徳兵衛は其の場に昏倒してしまひました。

家族の介抱で徳兵衛は暫くしてやつと息を吹きかへしましたが、それ以來床について、病は日一日と昂進するばかりでありました。

再び立つことの出来ないのを自覺した徳兵衛は、或る日、女房をひそかに枕邊に呼んで金を埋めた事の顛末を打ち明け「我が亡き後に其の木の下を掘つて見よ」と、遺言して、残り惜しくも息をひき取りました。

泣く／＼野邊の送りを済ませた後で、女房は遺言の通り竹藪に行つて見ました。しかし、女房の探り當てた椿は普通の椿でありました。そして其の根元を随分深く掘つて見ましたけれども、莫大の黄金は影も形もなく、蛙に化けて飛び出すものさへなかつたのであります。

それから長者の家は次第に衰へて、間もなく人も家も絶えたといふこととてあります。

當時、一帯に陸地で、長者の邸宅のあつたといはれてゐる塔の輪の下は、今は幾十丈の頭蓋が淵（或は地替が淵とも自害が淵とも云ひます）となつて、晴れた日は神祕な千古の暗藍色を湛へて小波が岩窟に囁き交し、龍神一旦怒れば風浪に尖れる巖は虎狼の如く、鞆鞆寄せて碎ける怒濤に物凄く咆哮してゐます。



夢を買ふ話

間瀬の濱邊に仁助と云ふ若衆が住んでゐた。  
年老いた兩親を抱<sup>か</sup>いて、水も呑まれぬ有様なので、里の長者に身を賣つて、心ばかりの孝養を盡してゐた。

或る夏も終りに近い日の午後のことであつた。

仁助は傍輩の下男と一緒に長者の裏山に芝刈りに行つた。其の日はいつにない厳しい暑さであつた。二人は木蔭に立ち寄り、草の上に寝ころんで、骨を盗んでゐた。

光と熱とに満ちた大空は、無数の針が遊ぎ上るやうに、きら／＼輝いてゐた。静寂が

漂ひ溢れてゐる森の中には、蟬時雨が煎りつくやうに降り注いだ。

木立の間から佐渡が遙かに見えた。白帆が木の間に縫うていくつか過ぎた。

二人は近所の娘達の噂などをし合つて、他愛もなく笑ひ興じてゐた。其の間にもやがて年があく仁助は、其の後の身の振り方や、両親の身の上やが絶えず案じられた。

其の心配の間を縫うて可愛い娘の顔なども、いくつか彼の頭の中を通り過ぎて行つた。

氣がつくと、傍輩の下男はいつの間にかやらずや／＼と快い眠りに落ちてゐた。

「おや、もう眠つたのか、苦勞がないなあ」

獨言を云ひながら仁助は、ぐるりと寝返りを打つた。

恰度、其の時である。

佐渡の方から一疋の赤蜂が海の上を渡つて、弾力性の羽音高く飛んで來た。

「あぶない」と、思ふ間もなく、其の蜂は眠つてゐる傍輩の下男の鼻の上に止つた。

拂ひ落さうと仁助が腰の手拭を取つてゐる間に、件の蜂は傍輩の下男の鼻のまはりを二度廻つて、吸ひ込まれるやうに鼻の穴の中に這入つてしまつた。

びつくりした仁助は「呼び起さう」と、傍輩の下男の肩に手をかけたが、

「蜂が這入つてゐるものと呼び起して、鼻の中を整されてもしたら大變だ」と思つたので、心配しながらも其の儘にして、事の成行きを熟と見てゐた。

傍輩の下男は何の苦もなささうに、矢張、平和な眠りを續けてゐた。

なか／＼蜂は出て來ない。

仁助は愈々心配して、起さうか、起さうかと思つては躊躇してゐた。ものゝ半時もたつたかと思ふ頃、漸く蜂が出て來て、また前の通り鼻の上に止つた。それから三度鼻のまはりを廻つて、また羽音高く佐渡の方へ飛んで行つた。

傍輩の下男は未だ覺めなかつた。

仁助はたまり兼ねて揺り起した。

「まあ、よく眠つたもんだなあ、まるで死んだやうになつてさ………鼻の中は痛みはしないから」

漸く覺めた傍輩の下男は、目をこすりながら起き上つて、半殘の夢の名残を追ふや

うな霞んだ目付きて、

「馬鹿な夢を見たもんだ」と、欠呻まじりに云つた。

「夢を見た？え？どんな夢を見た……またあの子の夢かい。」

仁助は好奇心な瞳を輝した。

「なに、つまらん夢さ」と、傍輩の下男は腕を掻きながら、

「俺が野中に一人で寝ころんでゐたんだ。するとな、どこからともなく火のやうな眞赤な衣を着た一人の坊んさんが傍に來て、そしてかう云ふんだ。——衲は佐州榎木谷正光寺と云ふ寺の僧だ。正光寺山門前の榎木の根下に澤山の黄金が埋つてゐる。それをお前に授ける爲めに態々來たのだ。早く窺かに來て掘り取れ、疑うて躊躇する時は他人の手に渡るであらう——と、さう云ふかと思ふと何處かへ行つてしまつたんだ」

「へえ——」

此の時、仁助の頭に或る詐欺的な狡猾な考が浮んでゐた。

「俗に云ふ夢妄想つてな、つまらんやつさ」と、傍輩の下男は事もなげに云つて笑つ

た。

「妙な夢だな……そんな馬鹿氣な夢は早く誰かに賣つた方がいいや。さうすれば後に未練が残らんでよいものだ」

胸を躍らせた仁助は、そしらぬ顔して相手の心を探つて見た。

「賣る？夢をか。馬鹿な、誰が夢なんか買ふものか、阿呆らしい」

傍輩の下男は、てんで相手にしなかつた。

仁助は益々乘氣になつて、

「そんなら俺が買はう」と、息をはづませた。

「よし買らう。一升だぜ」

「さうとも、買つた」

傍輩の下男は冗談半分に云つた積りの夢の賣買が忽ち成立して、仁助は本氣に酒買ひに山を下つた。

後に残つた傍輩の下男は、此際にと立ち上つて芝を刈りながら、

「馬鹿だな、仁助は。夢なんか買うて何にするんだらう。物好きにも程がある。氣でも違ひやしないか……まあ、いや。久し振りに甘い酒が呑める」と喉を鳴して一人笑壺に入つてゐた。

程過ぎて仁助は歸つて來た。そして約束の酒一升で傍輩の下男から、完全に夢を現に買ひ取つたのである。

## 二

やがて年が明けた仁助は、兩親の許に戻つて來た。

落着かぬは彼の心である。夢寐にも忘れぬは正光寺の榎木の根下である。それを思ふと彼は仕事も手につかなかつた。人の話も上の空で聞いた。

或る日の事である。

意を決した仁助は、

「若い中に江戸に出て一稼ぎして來たい」と、強ひて兩親に歎願して、旅装もそこそこに出た。

村を出離れると仁助は道を變へて窈かに新潟に行つた。其處で便船を求めて人知れず佐渡に渡り、漸く正光寺を尋ねあてた。

見れば山門前には、買つた夢の通りの榎木の太木があつた。

仁助は躍り上つて喜んだ。

恰度、其の時である。

「正光寺では目下寺男を一人求めてゐる」と、云ふ事が判つた。

仁助は渡りに舟と大いに喜んで、早速傳を求めて其の寺に住み込んだ。

胸に一物ある彼の働き振りは、忽ち住持の心になつた。住持は仁助を陰日向のない律義一遍の者と信用して、何くれとなく目をかけて使つてゐた。

二月ばかり過ぎた。

或日のことである。

住持にお茶の給仕をしながら、四方八方の話をしてゐた仁助は、頃合を見計らつて徐ろに彼の榎木の話を持ち出した。其の榎木は随分古いもので、事實、もう半ば朽ちかけてゐた。

「腐らして仕舞ふより、いつそ今の中に伐り倒して、薪にでもしたらいかかてゐませう」と、仁助が訊いた。

「よからう」と、住持は二つ返事で承諾した。

翌日から仁助は人手を借りずに根氣よく、毎日仕事の隙を見て、榎木の枝を拂ひ、根を掘つた。根下の苔は庫裡の庭に移植して住持の心を迎へることを忘れなかつた。數日たつた。

其の日は住持をはじめ寺中皆外出して、仁助が一人留守居に残つた。好機逸すべからずと思つた仁助は、榎木に繩をかけ、二三の根を伐り拂つて引き倒した。

果して一箇の大きな壺が出た。蓋を取つて見ると、中には燦然と輝く黄金が一杯這入つてゐた。

驚喜した仁助は、素早く其の黄金の壺を彼の部屋の縁の下を掘つて、人知れず埋めてしまつた。

河食はぬ顔で榎木の後始末などしてゐると、聽て住持が歸つて來た。そして榎木の倒れてゐるのを見て、仁助の骨折を勞つた。

其の日の晩である。

仁助はいかにも心配氣な風を装うて、住持の部屋に這入つて行つた。

「今日も留守の間に國許から急な便りがありまして、父の重病を知らせて來ました。息ある中に一目逢ひ度うムいますから、暫らくのお暇を戴きたうムいます」と、願つた。

住持はいたく不惑に思つて、即座に其の願ひを許した。

仁助はまた、

「父は平生砂糖を大層好みました。家が貧しいためにそれさへも満足に食べさせられ

なかつたのであります。お給金を載いて砂糖を求めて行き度うございます」と、重ねて願つた。

それも直ぐに許された。

仕済したりと心ひそかに喜んだ仁助は、早速砂糖の壺を買求め、人知れず黄金の壺と取り替へて荷造りし、翌朝、正光寺を出立した。それから便船を求めてまた新潟に渡り、道中恙なく故郷に歸つたのである。

その後仁助の家は富み榮えて、永く續いたと云ふことである。



鏡  
が  
池



直江津の西方五智國分寺の傍に一つの池があります。池畔には墨黒々と「鏡が池」と書いた標札が立てられてゐます。錆びた池の水面には愁しげな菱が、いたいけな葉を浮せて、夏になると小さな悲しげな花をつけるのです。汀には片葉の蘆と呼ばれる、世にも稀らしい片方にはかり葉の生ひる不思議な蘆が、劔のやうな葉を戦がせて、其の中からよじぎりなどがよく忙しげに啼いてゐるのを聞くことがあります。

或る秋の夕暮方でありました。

海に泊りの船もなく、浦寂びた砂の上を、破れ衣に草鞋を穿いた、此の邊に見慣れぬ一人の旅僧が、傾く夕日に長い影を曳いて、とぼくと彷徨うて來ました。旅路の疲れに喉が渴いたか、旅僧はとある門邊に立つて一杯の水を所望しました。ところが素氣なく斷られたので、彼方此方へ立ち寄つて幾度も乞うて見ましたけれども、一軒として與へるところがありません。

それは、此のあたりは頗る水に不便な處で、住民は半里も離れた山の裾から飲水を汲んで來るので、見知らぬ旅僧に此の貴重な水を容易く與へる者は一人も無かつたのでありました。

事情を聞いた旅僧は、身の渴を忘れて住民の切ない境遇に同情の泪を垂れました。心を決した旅僧は暫く彼方此方歩きまはつて地相を檢べてゐましたが、ふと、とある砂丘の上に立ち止つて、合掌瞑目、聲朗かに讀經をはじめました。其の姿は刻々に色彩を變へて行く夕日の洪水の中に、さながら石像の如く、一際崇嚴に見えました。

やがて紅玉のやうに輝いてゐた夕日が波の上に金蛇を走らせて、海の底に吸ひ込ま

れました。すると同時に讀經の聲もはたと歇みました。

と、不思議にも西方に當つて一片の黒雲が現はれました。それが見る間に黒い翼を擴げて満天を覆ひ、忽ち急雨沛然として降り出したのでありました。

旅僧は射るやうな無数の銀箭に刺されて、石地蔵のやうに動かうともしませんでした。雨は愈々烈しく降つて來ます。旅僧の周圍には幾筋かの細い川が出來て、高處から低地へ流れ込む水は瞬く中に砂丘の前の凹地に漫々と湛へて、大きな池を造りました。すると此の時雨は既に遠く北方に去つて、波上に時ならぬ霞を躍らせてゐました。旅僧は莞爾笑つて池の汀に下り立ち、底の眞砂も數へられるやうな清水を掬ひました。

其の後、旅僧は此の池のほとりにさゝやかな庵を結び、己が姿を池の水鏡に寫して我が像を刻み始めました。雨の日も風の日も、黎明から深更まで鑿の音が絶えませんでした。男らしく凜として犯し難い中に、三つ子も絶る温みのある姿がずん／＼と木に刻まれて行きました。

或る日のこと、旅僧は半ば以上出来上つた己が像に見惚れて、一人笑壺に入つて居ると、何とも云ひぬ美しい笛の音が聞えて來ましたので、鑿の手をやめて對岸を見ました。すると天女かと思はれる美しい少女が蘆間から半身を現はして、蘆の葉を唇にあてて微笑んでゐるではありませんか。魂を奪はれた旅僧は恍惚として危く鑿を取り落さうとして、はつと我にかへりました。

鑿の音は再び力強く響きました。

翌日から毎日同じ時刻になると少女は對岸に現はれて、其のあてやかな姿をちらちら水に寫し、蘆笛を吹いて、此の旅僧に誘惑の音を送りました。然し鑿の音はそれのために露亂されることもなく、旅僧の瞳は終に一度も其の方に向けられなかつたので

あります。

或る日のことでありました。

旅僧の姿は忽焉として此の庵から消えて行方知れずになりました。あとには生けるが如き彼の僧の木像が残つてゐて、其の臺には「空海刻」の三字が刻まれてありました。

其の後、此の里には到る處に清水が湧き出て、段々人家が殖え、旅僧の弘法大師が姿を寫された池を「鏡が池」と呼ぶやうになりました。

大師の庵は今も其の儘池のほとりに残り、善男善女の參詣ひきも切らぬ有様であります。

汀の蘆は魔性の少女が誘惑の笛を吹きならすために、悉く片葉を摘み取つてからは、片方にのみ生ひないと云はれ、俗に「片葉の蘆」と呼ばれて、道行く人にありし昔を語るかのやうに、吹く風に葉擦れの音を立てゝゐます。

百  
間  
堤



長岡近郊成願寺に百間堤と云ふ大きな池がある。

晩秋の頃、此の池の岸に來つて立つて見給へ。池を取り圍む滿山の樹林は盡く霜に染つて火のやうに燃えさかり、幾團の彩雲は悉く落ちて水に寫り、朝日夕日が峰を滑つて林中より池の面を照す時、其の美しさつたらない。

それは月の美しい或る秋の夜の事であつた。池の周圍の樹林の頂は、天心に來た月の滴るやうな冷い光を浴びて水のやうに輝き、枝葉に光を遮られた幹は眞黒く並び立つて、汀に其の影を印し、青白く光つてゐる水面は池を周る佗しい虫の音樂に旋律的に小波が顫へてゐた。

か、さ、く、と草を分ける音がした。

其のあたり虫の音が一時に歇んだ。夜嵐か、あらず、一人の若い琵琶法師が琵琶を携へて堤に上つて來たのである。

法師は只一人麓に住む琵琶の名手であつた。

千里限ない此の月明に、空に歸雁の聲を聞き、窓に墨繪の鮮麗を見ては、何として心靜かに孤枕の夢を結ばれよう。月に浮れ、嵐に嘯いて、そこはかたなく歩き廻つてゐるうちに、ゆくりなくも此の堤に來たのであらう。

南な翔かほり北きた嚮むかひ  
東あづま出いで西にし流なが

難たがひ附つけ寒かん温ぬる於お秋あき鴈かり  
唯ただ寄よ瞻せん望ぼう於お曉あけ月つき

と、詠ひ澄した法師は、とある切株に腰を下して、降り注ぐ月光の中に撥音高く池に向つて小督の一曲を弾じ始めた。

其の妙たなる音締とに纏綿たの情を奏そて、斷腸たの思しひを月に泣なく時とき、叢裡むら百蟲ひゃくちゅうために鳴なを

鎮しづめ、山の精池せいぢの主ぬしも耳みみを欬かてるかと思おもはれるばかりであつた。

此の事があつてから間もなく法師は世話する人があつて美しい妻を迎へた。

彼等は餘所の見る目も妬ねたましい程睦なごじかつた。彼等の上に幸福な年月が續いた。春は櫻花が彼等を祝福するやうに野山に咲いた。二人は花に浮れ霞に酔ようて、山に早蕨はやわづらを取り田いに芹せりを摘とんだ。夏になると二人は月に憧あこがれ螢へいを追おうて、そぞろ歩あきの夜よを更さらした。空そらでは美しい星ほしが樂たのしい此この妹背中いもせなかつらを羨うらやむやうに瞬ひらいてゐた。秋あきは野山のやまが紅葉もみぢの錦にしきを著きて彼等かれらを迎むかへた。二人は茸狩しんじゆかりに日ひを暮くし、栗くりの實みを食たべながら夜長よながを語かたり續つけた。かうして幾いく歳とせの月日つきひが淀よどみなく流ながれた。

或あるる年の初夏つゆであつた。

幾十日いくじふにちとなく早ひやくが續ついて田いに龜裂かみさへ生うずるやうになつた。田植時いんぢときの農民のうじんは生うきた色いろもなかつた。井水いづみづは涸かわれ、池いけは干かわた。雨乞あめごの祈禱いのりは到いたる處ところに行いはれて戰場せんじやうのやうな騒さわぎとなつた。

村人が命の綱と頼んだ百間堤の水は惜み惜み田に供給された。かうして植付だけは辛うじて終つた。

然し雨乞の効験は更になく、毎日々々烈火のやうな旱が續いて、雲片一つ空に浮ばうともしなかつた。

限りある水に限りない需用。さしも漫々と湛へた百間堤も、あさましや千古秘めた其の肌を、やがて露さねばならぬ時が来た。

これより先き、法師の妻は段々陰鬱になつて行つた。ともすると一日中口も利かぬ事さへあつた。次第に色香は衰へ食事も細つて来た。法師が譯を訊くといつても泪ぐんては部屋の隅に行つて、いつまでもしくしく泣いてゐた。

或る晩のことであつた。

不圖

「身籠つたのではないかしら」と、氣付いた法師は懇ろにいたわりながらも心配して寢についた。

翌朝目覺めた法師は傍に妻の空の寢床を見出した。

びつくり驚いて起き上ると、其の枕下には一通の書置があつた。取り上げた法師の手はわな／＼と震ひ、泪が止め度もなく頬を傳うた。

妻は堤の精であつた。

「一つには村人のため、一つには正に盡きようとしてゐる自身の命のため、どうしても堤にかへらねばならぬ。恥しや堤の肌を浮世の風に晒したが最後、我が命は永久に亡びてしまふ。思へば儂い妹背の契であつた。月の美しい夜な夜なには、堤に来て懐しの琵琶の音を聞かせて給べ。花の匂ふ朝な朝なには、水に寫していとのかんばせを見せて給べ」と、走り書きに記してあつた。

法師は書置を顔にあて、よよと泣いた。

急にあたりはけたましく右往左往に人の罵り騒ぐ聲に脅かされた。

見れば鋸山の齒の上にあたつて一片の雲が現はれてゐた。それが瞬く中にひろがつ

て百間堤の上に靡きかゝるよと見る間に、空は一面の黒雲に覆はれ、雷鳴しきり風さへ加はつて物凄い動亂の光景を呈して來た。

「そら雨だ」と、云ふ間もなく閃々たる電光と交錯して山も丘も家も潰れるかと思ふ程の大雨が沛然として無數の銀箭を地に突き刺した。

村人は屋根の漏るのも壁の落ちるのもかまはずに、有頂天になつて喜んだ。

小半日も降つて雨は霽れた。

田の稻は青々と蘇つて、稻株は半ば水に漬つてゐた。

百間堤は瀧のやうに四方の山から注ぐ水を併せ呑んで、忽ち元の漫々と湛へた池にかへつた。そして汀には群立つ蘆が雨後の涼風に戦ぎ、水面は波が大きなうねりを作つて、灰色に重々しく揺れてゐた。

法師は其の一日戸を閉じて外へ出なかつた。

其の晩はまた美しい月夜であつた。

馴れぬ一人寝の寂しさに到底堪へなかつた法師は琵琶を携へて百間堤に上つて行つ

た。もしやと思ふ妻の姿も幻に浮ぶのみで、影や形は其の何處にも見出し得なかつた。

法師はとある切株に腰を下してまた小督の一曲を奏てた。別けて今宵は撥音が冴えて聞えるやうに思はれた。池の水は思ひ做しか漣を立て、哀愁の臉を屢叩しばたいてゐるやうであつた。

と、法師は水底に當つて我が名を呼ぶ懐しの妻の聲を聞いた。空耳ではないかと思ひながらもふらふらと立ち上つて汀に寄つて行つた。

其の晩である。

堤に悲劇があつた。

翌朝、草刈りに來た農夫は堤上に捨てある法師の琵琶と下駄とを見出した。

忽ち大騒ぎになつて、村人が池の中を隈なく搜索したけれども法師の死体は終に発見することが出来なかつた。遺愛の琵琶は其の後いつともなく紛失して、今に行方が知れぬさうである。



若し月明の夜など堤に立つて池に耳を澄して聴いて見給へ。水底に當つて時に琵琶の音のやうな不思議なメロデーを聞くであらう。  
かうした哀話を秘めた百間堤は千古曇りない鏡をのべて、四季折々の自然の美しい姿を寫しとつて、過ぎし哀れを言に啼く鳥の聲々に小波を立てこゐる。



金佛さまが飴を嘗めたといふ話

昔、或る寺に利口な小僧がありました。

その寺の和尚さんは毎日々々大きな壺の中から飴を出しては一人て嘗めながら、小僧には一口も食べさせませんでした。そして小僧に向つて云ふには、

「これ小僧や、これは子供がなめると即座に死んでしまふものだから、衲わしの留守の間でも決してこれに手をつけてはなりませんぞ」と、常に云ひきかせてゐました。

利口な小僧は、

「大人おとながなめて何ともないものを、子供がなめて死ぬといふ道理がない。和尚さんは私に嘗めさせたくないものだから、あんなことを言ふに違ひない。どうかしてあの飴を嘗める工夫はないか」と、日夜そのことばかり考へてゐました。

すると或る日のこと、和尚さんは小僧を自分の居間に呼んで、自らは飴を嘗めながら、

「小僧や、納おしはこれから用があつて外出するから、温順おとなしく留守居をしてをらねばなりませんぞ。だが、いつもいふ通り、此の壺の中のものの子供が嘗めると即座に死んでしまふから、忘れても手をつけてはなりませんぞ」と、堅く云ひふくめて、やがて出て行きました。

後見送つてゐた小僧は、和尚さんの姿が見えなくなると、早速和尚さんの部屋に飛び込んで、壺の蓋をとつて見ました。中には涎の垂れさうな飴がまだ八分通り残つてゐました。小僧は指先にその飴をからめて一口嘗めて見ました。それはそれは頬の肉がぬけ落ちる程甘かつたのです。また一口嘗めて見ました。けれどもちつとも即座に死ぬやうなことはありません。で、また一口嘗めて見ました。まだ死にません。安心した小僧は後先の考へもなく、瞬くうちに皆嘗め盡してしまひました。

さあ、大變。和尚さんが歸つて來たらどんなに叱られるか分らない。どうかしてそれを塗つておきました。

「からしておけば大丈夫」と、小僧は何か心に鎮きながら、和尚さんの歸りを待つてゐました。

やがて和尚さんが歸つて來ました。

小僧は口を拭つて知らん顔して、玄關に出迎へました。

和尚さんは早速自分の居間に行つて、第一に飴を嘗めようと、壺の蓋をとつて見ました。すると何もありません。むらむらと腹を立てた和尚さんは、聲も荒々しく、

「小僧や、小僧」と、呼びました。

「ぞら來た」と、思つた小僧は何食はぬ顔して、和尚さんの居間に飛んで行きました。

和尚さんの體內には怒りが充滿してゐました。

小僧は空惚そとぼけて、どしんと、膝小僧を出して、和尚さんの前に坐りました。

れを免れる方法はないかと、色々思案した結果、漸く一計を案じ出しました。そして、壺のふちについてゐた飴の残りを指先でかき集めて、それを内陣の金佛さまの口の端に塗つておきました。

「からしておけば大丈夫」と、小僧は何か心に鎮きながら、和尚さんの歸りを待つてゐました。

やがて和尚さんが歸つて來ました。

小僧は口を拭つて知らん顔して、玄關に出迎へました。

和尚さんは早速自分の居間に行つて、第一に飴を嘗めようと、壺の蓋をとつて見ました。すると何もありません。むらむらと腹を立てた和尚さんは、聲も荒々しく、

「小僧や、小僧」と、呼びました。

「ぞら來た」と、思つた小僧は何食はぬ顔して、和尚さんの居間に飛んで行きました。

和尚さんの體內には怒りが充滿してゐました。

小僧は空惚そとぼけて、どしんと、膝小僧を出して、和尚さんの前に坐りました。

和尚さんはぢつと、意地のわるさうな、人の心を探るやうな目付で小僧の顔を見ておりましたが、

「小僧や、嘘を言つてはなりませんぞ」と、嚴かに申し渡しました。

小僧は膝の上に両手をついて、

「和尚さん、決して嘘は申しません」と、かしこまつて云ひました。

「ではお前に訊くが、此の壺の中の飴はお前が嘗めたのだらう」と、云ひました。

「飴だか何だか知りませんが、私は決して嘗めません」と、小僧はきつぱり答へました。

「いや、お前に違ひない。お前の外、誰も此の寺には居ないのだから。嘗めたら嘗めたて宜いから、正直に云ひなさい。嘘を云ふと佛さまの罰があたるぞ」と、和尚さんが責めるやうに云ひました。

すると小僧は、

「何と云はれましても、私は決して嘗めません……さうさう、さう云へばさつき内陣の方から和尚さんのお居間の方へ誰か歩いて行くやうな音がしましたが、ことによつたら金佛さまが嘗められたのかも知れません」と、眞面目になつて申しました。

「よしよし、お前がどうしても嘗めないと言ふのなら仕方がない。誰が嘗めたか金佛さまに聞いて見よう」と、和尚さんは苦り切つて、内陣の金佛さまの前に行きました。そして恭しく平伏して、

「申し金佛さま、壺の飴は小僧が嘗めましたか、それとも外の人が嘗めましたか、どうぞお知らせを願ひます。たしかに小僧が嘗めましたのなら、小僧が嘗めたと、はつきり仰有つて下さい。どうぞお願ひ申します」と、云ひました。

しかし何とも返事がありません。そこでまた重ねて、

「申し金佛さま。誰が嘗めましたか、どうぞお知らせを願ひます。たしかに小僧が嘗めましたのなら、小僧が嘗めたと、はつきり仰有つて下さい。どうぞお願ひ……」

次の部屋にこれを聽いてゐた小僧が可笑しさに堪へ兼ねて、思はず、くすり、と笑ひました。

「おや、金佛さまが笑ふのは可笑いぞ」と、聞き違ひした和尚さんは、ひよいと金佛さまのお顔を見ました。するとその口の端には一面に飴がついてゐるではありませんか。これを見た和尚さんは烈火の如く憤り、前にあつた撞木をとつて、いきなり金佛さまの頭を殴りました。

「くわん」と、大きな音がしました。

「なにッ、くわ(食)ん？云ふな此の金佛奴。食つた証據には、口の端一面に飴だらけになつてゐるではないか。これでもまだ食はんと云ふか」と、益々怒つて、續けさまに金佛さまの頭を殴りました。しかし、いくら殴つても、殴つても、殴る度に「くわん、くわん」と、大聲を擧げるので、和尚さんは堪へ兼ねて、小僧に吩咐けて繩を取り寄せました。

小僧は我が計略圖に當つたりと、ひそかに笑ひながら見てゐました。

和尚さんは飛びかゝつて、金佛さまの首に件の繩を縛りつけ、力にまかして壘の上に引きずり落しました。

「よしよし、食はんなら食はんでよい。今に食つたと云はして見せる。その時になつて吠面ほえづらかくな」と、教圍いさまきながら、諸肌もみはたぬいて、金佛さまを引きずつて庫裡くらに來ました。そして井の蓋をとつて、

「愈々食はんか、此の金佛奴」と、また一つ力まかせに殴りました。するとまた、  
「くわん」と、大きな音を立てました。

「ウヌッ、剛情な金佛奴。どうするか見ろ」と、到頭、金佛さまを井戸の水深く釣り下げました。

「如何に剛情な金佛でも、かうしたら白狀するだらう」と、和尚さんは、汗を拭ひながら、さながら怒りの塊かたまりのやうに赤くなつて焼けてゐました。

小僧は、和尚さんが頭から湯氣を立てながら、諸肌もみはたぬぎになつて怒つてゐるのを見ると、可笑しくてたまらなかつたのです。しかし大事な場合、笑ひ聲を立てるわけに

も行かないので、こみ上げる可笑しさをぢつと堪へて見てみると、やがて和尚さんは、  
 「今度は白状するだらう」と、云つて金佛さまを水の上に引き上げました。すると金  
 佛さまから落ちる雫が水の上に垂れて、

「くたくたくたくたくた………」と、悲し氣な音が井戸側に響いて聞えました。

これを聞いた和尚さんは、

「なにッ、食た。そら見ろ。始めから眞直まっすぐに白状すればこんなひどい、冷たい目に遭  
 はんでもよいものを、剛情な金佛奴が………しかし、今回だけは許してやる。以後は  
 決して人の留守に飴など嘗めてはならぬぞ」と、堅く戒めて、金佛さまを許してやつた  
 と云ふことであります。



お  
 け  
 さ

越後の民謡中に最も著しく其の名を留めてゐるものは、「おけさ」と呼ばれる女である。其の「おけさ」の名を以てした越後の代表的な俚謡に「おけさ節」がある。「おけさ踊」もある。

巷間、傳へてゐるところに據ると、此の「おけさ」と呼ばれた女性は、いかにもおほやうで、いかにもあてやかで、たとへば都の太夫の道行振りに見るやうな、悠々たる態度と氣品とを備へてゐたらしい。

そして、其の「おけさ」の氣高い貴かな美貌に魅せられた男は、どんな人でも忽ち息がつまる程性の衝動を感じて、ぢつとしては見てゐられなかつたといふ。

しかし、それほど名高い「おけさ」も、其の生きてゐた年代が判らない。また、其の

後半生はどんな生涯を送つたかも判らない、傳奇的な口碑によれば、只それが怪猫の化身であつたと語り傳へられてゐるばかりである。

其の傳説によるとかうである。

昔、新發田の近郷に何不足なく暮してゐた老夫婦があつた。頼りにしてゐた一人の息子は、年頃になると放蕩三昧に身を持ちくづして、家を外に遊びまはるやうになつた。飲代に困ると両親を嚇しつけては金を強請した。其の金も無くなると、片つ端から家財道具を賣り拂ひ、揚句の果は先祖傳來の田畑まで人手に渡して、行方知れずになつてしまつた。愚かな子程可愛いとやら、お婆さんはそれが因もとて到頭病氣になつて、お爺さんの手厚い看護も何の效驗もなく、次第々々に衰へて行つた。お爺さんは其の日其の日の米にさへも差聞へるやうな状態なので、命旦夕に迫つてゐるお婆さんに薬さへも碌々飲ませられなかつたのである。

其の家に十數年來飼はれてゐた一疋の猫があつた。

或る日、お爺さんは圍爐裡に粗朶を焚いて暖をとつてゐると、其の猫も傍に蹲つてゐた。どうかしてお婆さんに善い薬も吞ませ、甘いものでも食べさせてやりたいと思ふ心が絶えずお爺さんの頭から離れなかつた。それにつけても先立つものは金である。ああ金が欲しいと思ふとつい愚痴にもなつて、傍の猫に向ひ、

「貴様も十數年來飼はれた恩を知るならば、何とかして此の貧苦を救うてくれる氣はないか」と、云つて見た。

すると猫は悲しさうに一聲鳴いたが、其の儘そこ戶外へ出てしまつた。

其の晩である。眞夜中に、

「お爺さん、お爺さん」と、呼ぶ聲がする。

「誰であらう」と、お爺さんが其の方を見ると、世にも美しい十七八の娘が立つてゐる。

不思議に思つて、



「お前は誰だ」と、聲をかけると、その娘は、

「何を隠しませう。わたくしは十數年來お家に飼はれました猫であります。大恩を受けました主家の悲境を餘所にして、わたくしは安閑と居眠りしてはゐられません。わけて今日のお歎きが、しみじみと身に沁みて、いかにもお痛はしう存じました。身は畜生ながらも萬分の一の御恩返しに、此の姿で藝者稼ぎをいたしますから、其の身代金でお家を再興して下さい」と、ぼろぼろ涙を零した。

それが冷く顔に降りかかつたと思ふと、お爺さんは、はつと眼が覺めた。

側にはお婆さんが重い病の床に就いてゐるばかりで、外に誰もゐなかつた。

「今のは夢か、貧苦の疲れて下らぬ夢を見たわい」と、お爺さんは自ら嘲りながら、またとろとろと微睡んだと思ふと、再び同じ夢を見た。

「お疑ひ下さるな。明朝、村端れて屹度お出を待つてゐます」と、其の娘は眞心面にあらはして云ふのであつた。

夜があけた。

猫の姿は家のどこにも見え出されなかつた。

お婆さんに其の話をしたお爺さんは、疑ひながらも村端れに行つて見た。明け暮れの色が軒や木の茂みに煤け漂うてゐた。朝剛炊ぐ火が家々から赤く見えた。未だあたり人の氣はなかつた。

「よく来て下されました」と、夢に見た娘が何處からともなく、ひよつこりとお爺さんの前に現れた。

其の娘の縹緞は夢に見た時より幾十倍の美しさと、幾十倍の氣高さを増してゐた。猫の化身であるとは知りつつも、お爺さんはうつとり見惚れて、暫くは物も云ひ得ない程であつた。

娘はお爺さんの手で新潟のさる料理屋に百兩で賣り込まれた。

料理屋では稀に見る其の娘の縹緞に山のやうな望をかけ、店の一枚看板、金の生る木と莫大の費用を投じて藝を仕込んだ。

娘の上達は目覺しく早かつた。

やがて源氏名をおげさと名乗つてひろめをした。

新潟の町はこれが爲めに頓に美しく明るいやうになつた。戸毎におげさの名が宣傳されて、忽ち全盛を極めた。

男はひそかにおげさを知らないのを恥とした。

女はおげさを見ることの遅いのを悔むやうに、毎日其の店先に人の山を築いた。

おげさはまた、玉を轉ばすやうな美音を持つてゐた。其の上すぐれた舞踊の名手であつた。

おげさが一度唄へば、道行く人は歩を停め、近隣は仕事の手を休めて聴き惚れ、一度舞へば町内の人家には人が無かつた。

それが今に残る「おげさ節」「おげさ踊」である。

然るに此のおげさは、不思議なことには酒の座敷が濟むと、いつの間にもやら姿を隠してしまつて、いくら尋ねても判らなかつた。黄金の山を積んでも、權勢の威嚇を以て

しても、いつかな射落すことは出来なかつた。金に目の無い主人も、こればかりは如何ともすることが出来なかつたのである。

或る夜のことであつた。

明け方近くに主人が獨り床の中に眼を覺してゐると、部屋の外の廊下に衣擦れの音がする。

「今頃、誰であらう」と、そつと起上つて障子の隙間から覗いて見ると、それはおげさであつた。

「今夜こそおげさの歸るのを見つけた。どうするか見てやらう」と、足音を忍ばせて、主人は後をつけて行つて見た。すると宵のうち、次の間に下げた儘置忘れてゐた膳の上の残肴をしきりに貪り食つてゐるおげさの影が、行燈の光に朦朧と照し出されてゐるではないか。しかも其の形相を見ると、頭から上は股栗を覺える恐しい猫と變つて、皿の上の骨までもばりばりと物凄い音を立てて、噛み碎いてゐるのであつた。

主人は思はず「呀」と驚きの叫を發した。と、其の刹那。猫は忽ち窓を破つて何處と

もなく逃げ去つた。

そして、其の翌日から新潟の花と謠はれたおけさの姿は、永久に此の色の港から消え去つてしまつたのである。

一説に

おけさは新潟の女郎であつて、船頭の間夫を持つてゐた。或る晩、猫の正体をあらはして残肴を貪り食つてゐたところを、同衾してゐた其の船頭に見つけられた。おけさは悉皆己の本性を明して、懇ろに其の身の秘密を守つてくれと歎願した。しかるに船頭は程過ぎてから、うつかり口をこらして、其の秘密を舟の上で他に漏した。

すると忽ち一天かき曇つて、俄かに天地晦冥になり、雲に乗つて海上に垂れ下つた一疋の大猫が、其の船頭を捕へて瞬く間に八つ裂きにして海に捨てた。

それと同時におけさの姿が永久に新潟から消えたといふのである。

いつの頃であつたか、一人の新發意しんぱちが北蒲原郡の山中へ漂泊して行つた。そこは境が幽邃で、枝振りのよい樹が青く茂り、水が澄んでゐて、氣持のよい土地であつたので忽ち氣に入つてしまひ、其處に永住することにして、小さな草庵を造り、天氣の日は畑を耕し、雨の日は讀經して、靜かな日を送つてゐた。

草庵の前には壑があつた。壑は水や木のたゞずまひが自然に妙で、小鳥の歌が絶えず聞えてゐた。

風流氣のある新發意は常に窓に凭つて四邊の眺望を恣にした。

新發意は都の人らしかつた。北面の武士だつたに違ひないといふ人もあつた。兎に角、年は若いが凛として犯し難い氣品のある眉目秀麗な僧であつた。

庵室には飲食に必要な器物の外、何の調度もなかつた。新發意は由緒あり氣な金無垢の十一面觀世音を安置して、朝夕の勤行を怠らなかつた。

草庵の裏手に小徑があつた。時折、其處を往來する樵夫や牧童によつて、いつとはなしに草庵が世間に紹介されてゐた。

麓の里人は聞き傳へて、漸く此の氣高い、道徳堅固な新發意に無上の尊敬を拂ふやうになり、善男善女は相率ゐ、切に請うて、聖教の理を聽聞するやうになつた。

それは時雨が幽寂な囁きを交して、人の世を冷笑するやうに降つたり霽れたりする夜であつた。

新發意はいつもの勤行の最中であつた。

と、草庵の戸が音もなく開いて、畫像からぬけ出たかと思はれるやうな美しい女が、もぢもぢしておもはゆげに其處に立つてゐた。

三昧に入つてゐる新發意の金鈴を振るやうな尊い讀經の聲が暫くして歇んだ。

つゝと走り寄つた女は、激しい羞恥に燃えるやうな耳朶を新發意の墨染の衣の膝に埋めて、切ない心を潜然と泣いた。

「さては戀か、淺ましや」と、當惑した新發意はまたそごろ不惑にも思ふたが、今女の情に絆されて誓を破つたら、折角の發心も中道ですたれる……併し、これほどの者を今厳しく拒んだら屹度淵に身を投げるか、刃に伏すに違ひない。そしたら未來永劫浮ぶ時があるまい。いたわしいは此の女。自らとても木石ならねば我戀ふる人なに憎からう。しかし戀は擇ばれた男女ばかり之に酔ふことが出来る。その他は何れも失戀の悲しみに泣かねばならぬ。さうぢや。ここの道理をよく説き聞かせて憂世の掟に従はせようと、さて色々此の戀の叶はぬ譯を教へ諭したけれども、女は只泣くばかりでどうしても思ひきることが出来ないらしい。

困じ果てた新發意は意を決して、翌日から草庵に来て讀經の聽聞することだけを女に許した。

女は悄然として草庵を出た。

戸外はまた一としきり時雨が高い枝の上をさら／＼と降つて来て、一層濃くなつた林の闇の底の黒い土に泣きこんだ。

翌日から女の姿は夜毎に草庵に現れた。或る夜のことであつた。

夕の勤行を済した新發意は、時雨の通り過ぎるのを待つてゐる女と世間話をしてゐた。

恰度、その時、山仕事の歸途、草庵の裏手の小徑を通りかゝつた里の樵夫は、ふと、なまめかしい女の聲を耳にした。不審を起して草庵の中を覗ふと、今迄尊嚴の權化、生佛と里人が随喜渴仰してゐた新發意と、若い美しい女と對座して、いとも熱心に語らうてゐるではないか。

樵夫はびつくり驚いて馳せかへり、手柄顔にかくと里人に吹聴した。

里人の驚きは一通りではなかつた。彼等の欺かれた憤怒は烈火の炎をあげた。

「圓頂黒衣に身を窶して陽には虚の尊嚴で里人の信心を釣り、陰には女戒を破つて竊かに不義の快樂に耽る。賣僧よ、墮落僧よ」と、罵りながら「敲き殺せ」「焼き拂へ」と、大勢草庵に押し寄せて來た。

「露れた」と、思つた新發意は「身には微塵も疚しい事はないが、ひそかに女人と同座した上は、今更何と言ひ解く道もあるまい。もうこれまでである」と、覺悟を定めて、身を以て新發意の冤を雪がうとする女を強ひて壑の闇に避難させたのである。

里人は草庵を敲き破つて侵入して來た。新發意は觀念の眼を閉ぢて、靜かに念佛してゐた。

猛り立つた里人は、いきなり新發意の法衣を剝ぎ取つてひき倒し、打つ、蹴る、毆る、あらゆる暴行を加へた揚句、高手小手に縛め、

「生き埋めにしろ、石子詰にしろ」と、敦圀いて、荒らかに附近の丘に曳き立てた。新發意は自若として更に動ずる氣色もなく、稱名念佛して里人のするが儘に曳き立てられ、いたはしや、生きながら即夜丘の土と化してしまつたのである。

女は新發意が生き埋めにされたのを確かめると同時に一切の飲食を絶ち、間もなくこれも同じ丘の土となつた。

すると何時の間にか其の丘に一本の松が生えて次第に成長し、遂には幾抱の大木となり、天を摩す梢は常に彼の新發意の鉦の音にも擬ふ幽韻な調を奏て、里人の耳に限りない哀な唄を歌ひ續けたのである。

其の松を中心に散在する部落を後に俗稱一本松と呼んで、無慘を極めたそのかみを弔ひ合つたといふことである。



音 羽 の 池

佐渡は新穂の街から程遠からぬ海岸に沿うた丘の上に談議所といふ寺がある。廣福寺といつて眞言宗の巨刹である。

何百年昔のことか分らぬが、或る秋の夕暮此の寺の門前に一人の見馴れぬ少女が、しよんぼりと、いかにも悲しい頼りなげな風情で佇んでゐた。姿こそ窶れてゐたが、どこか氣高く麗しく、稀に見る容色の持主であつた。

少女は傾く夕日を背に浴びながら、暫くは思案に迷うてゐる體であつたが、つと門内に這入つて行つて方丈に面會を求めた。



そして次のやうなことを云つたのである。

「妾は都の生れ、年は十三、名は音羽と申します。仔細あつて父母の名は申されませぬが、先き頃の暴風雨に此の沖で船が難破したために連れ立つた人は行衛知れず、妾は波のまにまに漂うてゐるうちに、いつか氣が遠くなつてしまひましたが、程經て我にかへつて見ると磯邊に打ち上げられてゐて、辛き命を助かりました。外に寄る邊の無い身であります。哀れと思召して水仕女にでも使うて下さりませ」と、力なげに述べた。

これを聞いた方丈は大層不憫に思うてすぐ其の願を許し、奉公人ともつかず、客ともつかずに泊めておいた。

音羽は陰日向なく忠實に働いた。其の上美しくて利口で素直なので、寺中のたれかれにも可愛がられた。しかし彼の女は至つて無口で、用のある時の外は滅多に口を利かなかつた。

## 二

秋風は次第に冷かさを加へて來た。病葉は梢にしがみついて顛へてゐた。歎歎く蟲の聲が悲しく寺をめぐつて段々細つて行つた。秋も終りに近づいた。

越後の山々は白いものを冠つた。すると間もなく北の涯から海上を吹き通してくる寒風が綿毛のやうな雪をもたらし、やがて佐渡が島全體をすつぽりと眞白に包んだ。

音羽は黄昏時などよく獨り外に出て、白く冷く單調になつた島から本州の空を眺めては涙ぐんでゐた。

さうしてゐる中に段々氣候がゆるんで來て、雪が次第に海際からとけ初めると、春雨が梅が枝に煙つて、鶯が啼き霞が棚引いて來た。

音羽は漸く土地馴れて、近所の人とも馴染むやうになつた。島の皮膚の上を飾つた赤や、白や、紫の花が、ふやけたやうになつて風に散り雨に

腐ると、梢は嫩葉に新鮮な潑瀾たる色を漲らせた。畑には濃緑の麥が毒々しく波のやうに揺れ、道傍の蒲公英の花は白い穂になつて雑草の中に亂れ散つた。

青葉の蔭から絶えず杜鵑が叫んだ。

談議所の庫裡に面した庭からは緑の影が搖ぎ流れ、白い光と熱と静寂とは其の庭中に漂ひ溢れた。

音羽はともすれば午下りの一人閑居の時など、越し方行く末を思つて、泣きたいやうな寂しさにいつまでも浸つてゐることがあつた。

それは或る好晴の日のことであつた。

草木の緑、日の光、さては薄藍色の天空が氤氳の氣を漲らして人々の魂に迫り入つて來た。

音羽は近所の娘達に誘はれて、山へ苺取りに登つた。

白手拭を冠り、赤い蹴出しをして、腰に小さな籠を下げた少女達は陽氣に、そのかされて無性にはしやぎながら、巒から巒へ、谷から谷へ、嬉々として飛びまはり、蒸

れるやうな草いされの中を根氣よく苺をあさつて歩いたので、午頃までには皆の籠は紅い寶玉のやうな苺で一杯に滿された。

少女達は小鳥のやうに喋り交し、見晴しのよい場所を擇んで柔かい草の上に坐り、涎の垂れさうな苺の籠を前に飾つて各自其の收穫を比べ合ひ、限りない喜びに胸を躍らせながら晝食を認めた。

音羽は食後の飽滿と、馴れぬ歩行から來る軽い疲労と、心よい日光の肌障りのために、夢幻の境に來たやうにうとうと、こしたかと思ふと、いつか柔かい草を茵に可憐な睡りに陥つてゐた。

これを見た少女達は無邪氣な口に手をあて、冗談半分に音羽を残してまた他の山へ移つて行つた。

それから何時間かたつた。

音羽が灰色の不氣味な夢から覺めた時は、既に夕日が西山に沈んでしまつて、冷い風が谷の小笹を黒くゆるがしてゐた。

びつくり驚いた音羽は、しつかと抱いて寝てゐた苺の籠も何も打ち忘れて、恐しさに震ひながら、魂も身に添はぬ有様で山路を馳せ下つた。山の中腹に來かゝつた時、音羽はあやまつて泥濘ぬかるみに落ちこんで、蹴出しの裾を泥水の飛沫で汚した。

と見ると傍に小さな池が夕闇の中に光つて見えた。音羽は氣持がわるいので急いで其の汀におり立つて、泣きながら泥を洗ひ落してゐた。

すると不思議や周圍は忽ち深い恐しい漣の立つ淵と變つて、音羽の立つてゐる處だけがぼつちりと浮島のやうになつて残つた。はつと驚いて立ち竦んで居ると、眞黒く水面に立ち罩めた霧の中から、太く力強い聲が聞えた。

「やよ女、我は此の池の主ぬしの龍である。既に上天を許されたが、後繼者あとつぎが無いので久しく時の至るを待つてゐた。其の願叶つて今漸く御身に逢ふことが出來た。こんな嬉しいことはない。是非、我が後を繼いで此の池の主になつてくれ、今から七日の猶豫を與へる。七日目には屹度我自ら迎へに行くぞ」

聲がやむと水面がざわついて龍は水中に沈んだらしく、浮島は一人手に動き出して、戦慄そのぞさひれ伏してゐる音羽を乗せたまま岸についた。

## 三

寺に馳せ戻つた音羽は喪心したやうになつて床についた。

方丈が心配して色々事ことのわけを尋ねたが、音羽は潜然さめざめと泣くだけで何も語らなかつた。

其の中に期日が來た。

其の日は未明から雨が降り出して、暮近くなると烈しい電光雷鳴に風さへ加はつて、世の終りかと思はれるやうな大暴風雨となつた。

方丈は番僧等を率ゐて本堂に夕べの勤行ごんぎやうをしてゐた。尊い讀經の聲が今宵は別けて有難く力強く響いて聞えた。暗い内陣に酸漿のやうに浮いてゐる輪燈の光に煤けた彌

陀の像や佛具が微かに照し出されてゐた。隙間から吹きこむ風に線香の煙は蛇のやうにうねり揺めいた。

音羽は恐しさに震ひながら、獨り暗い部屋に臥してゐた。

すると突然、凄しい雷鳴と共に寺がみりく、揺れ出した。龍が迎へに來たのである。

龍は寺を七卷半巻いて、本堂の入口から其の巨大な頭を突きこみ「音羽を渡せ」と、方丈に迫つた。

勤行中の番僧等は一齊に氣絶した。

有繫に大悟した方丈は更に動ずる氣色もなく、靜かにこれに應對した。其の結果、方丈は音羽に納得させて、七日の後、街外れの地藏堂の前で彼の女を龍にひき渡さうと約束した。

すると龍は圍みを解いて去り、風雨も俄かに收つて、雨後の美しい空に星が瞬いて見えた。

方丈は悲みに溶けるかと思はれる程泣き崩れてゐる音羽に、諄々と因果の道理を説き聞かせた。

聞いてゐた音羽は次第に啜り泣きを歇めた。

そして方丈の話の終つた時には、音羽は全く生れ變つたやうに固い信仰を持つやうになつてゐた。

## 四

陰曆六月二十三日、それは二度目の期日である。

聞き傳へた村人は宵の中から大勢寺に集つて來た。

音羽が池に嫁くのを祝つて用意してあつた赤飯だの酒樽だのは夜明けぬ中に、松明を翳した若者達に背負はれて寺を出た。續いて音羽を乗せた駕籠は方丈や番僧や多くの村人等に護られて、一面の靄に暈抹された磯馴松の間を進んだ。月は青白く微かに

人魂のやうに空に懸つてゐた。悲痛な念佛の聲や鉦の音が四邊の寂寞を破つて響いた。鶏が鳴いて夜が明け放れる頃、行列は街端れの地藏堂の前で停つた。濡れ絹に薄墨が滲み渡つたやうに靄に罩められてゐる木立の中から聞える鳥の聲も雀の聲も、今日は悲しい明け方の樂の音のやうに聞えて、人々は今更ながら哀別の涙にくれた。すつかりあきらめた音羽の様子は全くかはつてゐた。彼の女は更に取り亂した様子もなく、晴れやかな顔をあげて、人々に最後の別れを告げた。髪を古風に結び、白無垢を着て、すらりと立つた彼の女の姿は女神のやうに神々しかった。

霽れかゝつた靄がまた濛々と立ち罩めて来て、あたりが薄暗くなつた。すると遙かに靄の中から駒の蹄の音が憂々と響いて、それが段々近づいて來た。

人々は恐れて皆平伏した。

方丈は音羽と並んで立つてゐた。

蹄の音が歇んだ。恐しいもの見たさに人々はそつと指の間から覗いて見ると、白馬

に跨つて白銀作りの太刀を佩いた白衣の貴公子が立つてゐた。

彼は馬から下りて方丈に一揖した後、音羽と微笑を交して彼の女を鞍の前輪に乗せ、祝の赤飯や酒を快く受けて鞍に積み、別れの挨拶をして馬に飛び乗るよと見る間に、再び霧の中に憂々の音を響かせて消え去つた。

それから七日間は野も山も全く霧に鎖されてゐたが、七日目には霧が變じて物凄しい大雨となつた。其の時、一條の火柱が大音響を立て、音羽の池から天に上るのが見られた。人々は龍が上天して音羽が代つて池の主になつたのだと云ひ合つた。

翌日からは空がすつかり晴れ渡つて、再び夏の日が佐渡が島根を晃々と照したといふ。

其の後、談議所では毎年陰曆六月廿三日には酒や赤飯を用意して、村人と共に音羽の池に行つて供養した。それが今でも續いてゐる。

雑木林に圍まれた音羽の池は、幾百年の落葉が腐れ重つて、青い中に墨汁のやうなどろんとした黒い凄味を帯びて、水が水銀のやうに光つてゐる。

音羽が裳裾を洗つたといふ浮島は、今も池の中央に漂うてゐて、其の島に湧く水は常に清冽極りないと云ふことである。

今、談議所では、音羽の遺物として、櫛と、鏡と、帷子かたびらの袖とが珍藏されてゐるといふ。



白

蛇

昔からよく古木は化けるとか祟るとかいつて、神社の境内などにある古木のまはりには、注連がまはしてあるものであります。

これは北魚沼郡須栗村の鎮守さまの境内の古木に起つた話であります。

今は昔、或る初夏の一日のことでありました。その日は空がよく晴れて、青葉若葉は白銀のやうな日光の洪水の中に、涼しい微風に顔へて美妙の音を立てゝゐました。この鎮守さまの近くに巢食うてゐた一群の白蟻は、その日も亦甘いご馳走を捜し歩いて、どろどろと社の境内に這入つて來ました。そして、あちこち捜し廻つてゐる中に素敵な佳味いご馳走を見つけました。それは注連で飾られた、何百年たつたかもある程の大きな古木でありました。

白蟻の一群は此の偉大な、しかも美味なご馳走にありついたので、雀躍して喜びました。そして各々は早速自分等の好きな根元を頂戴したり、幹を頂戴したり、枝を頂戴したりして、舌鼓を打つて鱸腹つめ込みました。それから残りのご馳走は、各自手分けして日の暮れるまで汗水流してせつせつとその栖處に運びつづけました。

翌日からは降つても照つても、彼等は朝から晩まで傍目もふらず一生懸命になつて、残りのご馳走を運ぶに餘念がありませんでした。

ところが茲に端なくも一大椿事が勃發したのであります。それは此のことが、附近の沼の主である世にも恐ろしい黒蛇に知れたからであります。

そのわけは、此の黒蛇はずつと以前から其の古木を己の戀人としてその愛を獨占してゐたのであります。然るに白蟻の一群のために、戀人は完膚なきまでに傷はれて見るも無慘な姿になつたので、黒蛇は全身の鱗を逆立て口からは火焰を吐いて怒りました。そこで忽ち烈日の下で、此の兩者の間に慘憺たる戦闘が起つたのであります。

見る間に白蟻は黒蛇のために山なすばかり噛み殺されました。しかし白蟻は幾百萬

となく居ましたから、新しき手を入れかへ入れかへして攻め立てたので、有繫に悍猛な黒蛇も終には全身針でつく程の隙間もない程白蟻に喰ひ込まれ、あまりの苦しさ七転八倒して腕きました。

すると此の有様を見てゐられた鎮守の神様は、黒蛇の怒るのが最もであると思召して黒蛇に味方され、隙間もなく喰ひ込んでゐた白蟻をそつくりそのまま黒蛇の鱗にしてしまはれました。

黒蛇は斷末魔の苦痛が忽ち拭ひ去るやうに治つて勝利を得たのでありましたが、しかし、それからといふものは沼の主の黒蛇は色が變つて、白蛇になつたといふことではありません。



守門嶽の天狗



長岡藩の指南番に今泉角内左衛門と云ふ武士があつた。

彼は身の丈六尺にあまり、巖のやうに豪膽で、しかも劍術にかけては適れな腕前であつたので、藩公のお覺えも至つて目出度く、家中の誰彼にも敬愛されてゐた。

或る秋の一日の事であつた。

彼は自慢の朱鞘の長劍を殆ど引き摺る如くに佩び、大きな瓢箪を腰にぶらさげて、旬日梳らぬ蓬のやうな鬚髪を小春の風に吹かせながら町を出て、守門嶽の麓の池へ魚釣りに出かけた。

道々、彼は威風凛々たる自身の姿にぞつぞん惚れこんで、得々然と歩いてゐると、「ほう、御指南番さまがと通りぢや」

町のものは目ひき袖ひきして彼の後姿を眺めながら私語した。

「町人共が俺の偉い噂をしてゐるわ」

己に對する人々の噂を小耳にはさんだ彼は、心中に優越感がこみ上げて來てかう咳くと同時に、一層肩を怒らし、得意の長劍に反そむをうたせて、昂然と濶歩するのであつた。そしてもう一度、彼等町人の前を威張つて通りたい心が盛んに湧き起つて來るのを無理に納得させて郊外に出た。

目的の池は殺生禁斷の池であつた。

池の端の平らな見晴しのよい處を擇んで腰を下した彼は、あたりに人氣のないのを幸ひ、何の躊躇もなく禁斷の池に鉤かぎを下げた。

鉤に馴れない素直な魚は見てゐるうちに幾尾も釣り上げられた。枯葉や木の枝を拾ひ集めて來た彼は、釣つた魚を焼いて鹽をつけて食べながら、ちびり、ちびりと呑んでゐた。

彼は自身の並びない武勇が嬉しくて堪らなかつた。

町人共が目ひき袖ひきして己の入神の技倆に嘆詠の囁きを交したのを思ひ出すと、愉快がこみ上げて絶えずふくみ笑ひが口許に絶えなかつた。

暫くすると、どこからともなく、

「今泉角内左衛門を殺せ。今泉内角左衛門を殺せ」と、云ふてはないか。

「不埒なことをほざく奴だ」と、彼はあたりを見廻したけれども人氣もない。

「空耳であつたか」と、笑ひながら、またも呑んでは釣つてゐると、また、

「今泉角内左衛門を殺せ、今泉角内左衛門を殺せ」と、云ふ。

「うぬッ。巫座戯た事をぬかす奴だ。手は見せんぞ」と、あたりを見廻しても人氣がなす。

「はて不思議な聲だな………」と、何氣なしに彼が空を見上げると、今度は別の聲で、

「俺は逆も今泉角内左衛門を殺すなどは思ひもよらん」と、云ふ。  
聲ばかりで影も形も見えない。

之を聞いた彼は、思はず長劍を撫して、

「ふん」と、得意の絶頂の微笑を洩しながら、またも呑みながら釣つてゐた。するとまた最初の聲で、

「恐れる必要はない。今泉角内左衛門の刀の鍔元三寸に、人の知らない疵がある。そこから打ち込め、殺すに何の難作もない。」と、いふ。

彼は、はつと冷水を浴せかけられたやうに身慄ひした。並びない己の勇名が忽ち地に落ちたやうに感じた。

「自身でさへ氣付かぬ疵を知つてゐるとは、必ず神通力を得た者に相違あるまい。迂濶に立ち合つたらとんだ後れをとらねばならぬ」と、有繋の彼も顔色蒼ざめて、飛ぶやうにして逃げ返つたと云ふことである。

「守門ヶ嶽に大天狗小天狗が住む」と、噂されるやうになつたのは、其の後間もない頃のことであつた。

其の頃

同藩に能勢某と云ふ醫者があつた。

長袖に似合はぬ亂暴者で、同家中の者には疫病神のやうに嫌はれてゐた。

「守門ヶ嶽に天狗が住む」と、人々が恐れて噂してゐるのを聞いた時、彼は、

「ふん」と、鼻で笑つた。

人々は自身の臆病を嘲り笑はれたやうに立腹した。

或る日の事である。

彼は單身、肩で風を切つて威張り散しながら、守門ヶ嶽の麓の池に行つた。

「天狗出て来い、目に物見せてくれる」と、空に向つて放言しながら、池の魚は捕る、放尿はする、木石は投げ込む。亂暴のありたけを盡した。

併し、何事もなかつた。

「天狗奴、恐れたか、音も立てぬわい」と、得意の鼻を蠢して空嘯いてゐると、虚空に聲あつて、

「能勢某よ。汝は悪運強くして、天命未だ盡きざれば、今俄かに手を下すこと叶ひ難

けれど、やはか此の恨を晴さて置くべき。汝の孫の代を待つて三族を根絶すべし。あら無念や、口惜しや」と、いふ。

矢張り影も形も見えないで、只聲ばかりあつた。

「何の天狗が世迷言をほざくわい」と、物足らなかつた彼は、其の儘悠々と歸つて來た。

それから數十年たつた。

能勢某も、其の子も隠居して、孫の代になつた。

果して彼の三族は何れも非業の最後を遂げて、一家滅亡してしまつた。

此の事によつて愈々今泉角内左衛門以來の守門ヶ嶽に天狗が住むといふ噂が、事實として証明されたのであつた。

今でも守門ヶ嶽の麓の人々には、ほんとに天狗が住んでゐると云ひ傳へられてゐるさうである。

お 辨 の 松

信越線青海川驛の近くに笠島と云ふ古驛がある。其の驛外懸崖の中腹に危くも根を固めて、荒い潮風に吹き撓められつゝ立つてゐる數株の松がある。

此の松こそ熱い戀の炎にうら若い身を焼き盡した、少女お辨が悲しい戀の奥津城である。

昔、佐渡にお辨といふ若い海人があつた。ふとした事から越後の男と割ない戀仲になつた。

所用を果した越後の男は、歸國の日が迫つたので、またの逢瀬を堅く契つて、やがて下宿村番神堂下の己が家に歸つて來た。

男は折に觸れ時につけて、お辨の優しい心根と情熱の漲つてゐる肉付や色香を思ひ出しては、憧憬の瞳を海の彼方に放ち、また或る時は、人目を忍んだ睦言の數々や、羞恥を含んだ可憐を姿態などを思ひ出して、一人笑つたりして人に揶揄はれた事も幾度かあつた。

女の戀は一層熾烈であつた。

海を隔てゝ想を馳せると云ふやうな便りない戀には到底忍び得なかつた。身は荒海に吞まれても、戀しい君の強い腕かみでに抱き締められねば満足が出来なかつた。

或の日、お辨は一大決心の臍を固めた。

太陽が西の海に吸ひ込まれると、お辨は人知れず盃に乗つて、兩の手を櫂として、水を掻いて沖へ出た。そして男の住んでゐる越後下宿番神岬しもじゆくの燈臺を目標にして、遂に四十五里の波路を乗り切つた。しかし、遙かな海を渡つて來たので、男に逢ふと直ぐ鶏が鳴いて東が白みかけて來た。お辨はせつない後朝きぬあさの別れに後髪を引かれる思ひで、また明日の夜を契つて佐渡へ返つて行つた。其の離れ難ない女の歎を聞いては、

男も涙に霞む目で盃の行方を追うて、いつまでも渚に立ち盡した。

かうした儂い逢瀬も、お辨には忘れぬ嬉しさであつた。お辨はそれから夜毎缺かさず盃の船で、海を渡つて男の許に通ひつめた。

男は最初の中こそ、これ程己を慕ひ焦れてゐるお辨の心根を、いとしくも亦嬉しく思つたけれども、次第に日數重なるにつれて、一夜も缺かさず波の四十五里を通つて來る、其の強い烈しい執著心が氣味悪くなり、空恐しくなり、果ては其の飽くなきお辨の執念深い性質を忌み嫌ふやうになつて來た。

男の心がお辨から外それれば外それる程、お辨の情はたかまつて行つた。男は遂にお辨の手から逃れようと決心し、其の晩は餘所へ行つて泊つた。するとどうして知つたか、お辨は何の雜作もなく尋ね當てゝ、別に恨みがましい事も云はずに逢つて、いつもの時刻に歸つて行つた。

翌晩も亦男は家を變へて餘所へ泊つた。それも何の苦もなく發見された。

其の頃からお辨は段々無口になり、凄味を帯びて來た。男はお辨に訪はれる度に身

の竦むのを覺えた。

翌晩からは長櫃の中にも隠れて見た、天井裏にも隠れて見た、白の下にも隠れて見たが、すべて無効であつた。お辨はまるで幽霊のやうに音も立てず、直接に男の居場所へ侵入して、さながら己が身を己が始末するやうに、男を自由勝手にして逢つては歸つて行つた。

男はもう堪らなくなつた。

或る晩の真夜中、男はお辨が海の中程に漕ぎ出した時刻を考へて、番神岬の燈臺の灯を、こつそりと、良心の呵責にわな／＼震ひながら消してしまつた。

男の國へ通ふ唯一の標的である燈臺の灯がふつと消えた時、海の真只中に漕ぎ出てゐたお辨は、氣絶せんばかりに嘆き悲んだであらう。

お辨が佐渡の岸を離れる時は、空は一面の糠星を鏤めて、銀河高く白く流れ、波穩かに氣清う澄んでゐたのに、灯の消えた頃から海の上に風が出て、波頭が白く立つて來た。水の底には次第に瘴惡な力が漲り渡り、波上には慄悍な魔が叫び走り、空は黒

雲飛んで、忽ち物凄い動亂の光景を呈して來た。

標的を失つた盪の船は、さながら狂氣のお辨が渾身の勇を奮ふ兩手の戀の權に繰られて、逆巻く怒濤の咆哮する闇の中を遮二無二突き進んだ。

十數年來風波に鍛へた流石お辨の兩腕も次第々に疲れて來た。咽は乾いて火の如く、兩眼眩めき五體痺れて、お辨は遂に盪の中に昏倒した。

夜があけた。

風は凧ぎ、波は靜まつて、空さりげなく澄み渡り、昨夜の事はまるで嘘のやうに、小春日暖かに輝いてゐた。

越後の男は、今にもお辨の亡霊が眼前に現はれるやうな氣がして、ぢつと部屋の中に居たたまらず、磯邊に走り出た。と、渚に打ちあげられてゐる怪しの死骸がある。近寄つて見ると、それはお辨ではないか。男は全身の血が一時に氷つたやうに青ざめて、五体わななき慄ひ、生きながら其の儘木乃伊になるかと思はれた。



見れば美しかつたお辨の花のかんばせは青白く膨れ、長い緑の髪は藻のやうに亂れ、真珠の齒は永劫の恨を食ひしげつて、最後の苦痛を横へてゐた。

哀れ知らぬ里人も、可惜、蕾の花を散した可憐な姿に同情の涙を濺いで、死骸を附近の山に埋め、印の松を植ゑたのが、即ちお辨の松であると言ふ。

お辨の松は其の磯馴れた枝を、波路遙かに薄紫に霞む佐渡が島の方に靡かせて、潮風が梢を渡る毎に、路行く人の耳に悲しい恨めし氣な唄をうたつてゐる。



黒  
姫  
山

越後と信濃の國境に妙高、黒姫、飯綱の三山が並び聳えてゐる。其の黒姫と飯綱との間を分け入ると戸隠連山に達する。また黒姫と妙高との間には、其の昔熊坂長範の住んだといふ長範山があつて、其の麓には熊坂村がある。

黒姫山はかの俠賊自來也が住んだと云ひ傳へられ、越後富士の稱ある口碑に富んだ山である。

むかし、信州中野に高梨攝津守と云ふ大名があつた。智謀衆に超え、群小を併呑して其の威四隣を震撼させてゐた。

娘に黒姫と云ふ十八九の美人があつた。戦にかけては比類ない勇將も、娘を可愛がることに於ては目が無かつた。随つて姫の要求は何一つ容れられないものはなく、姫

の一顰一笑が悉く城内の喜怒哀樂を支配する程であつた。

黒姫は平生琴を嗜んでゐて、堪能の聞えが高かつた。

或る日黒姫は徒然なるまゝに數寄を凝した庭に向ひ、居間の障子を明け放して、白魚のやうな指を琴の上に跳らせながら、妙なる音を奏してゐると恰度其の時、城の表門にあたつて身なり卑しからざる凛々しい侍が供をも連れず唯一人訪れて、城主攝津守に目通りを願ひ出た。併し、其の侍は己の姓名も名乗らず、越し方を問へばたゞ戸隠山から來たと云ふ。戰國の習ひ、いついかなる敵國の間者が城内の様子を探りに來ないものでもない。殊に此の唐突の訪問に、しかも住所姓名を明さぬ侍を門番は胡亂な者と見てとつて、取次叶はぬ由を劔もほろろの挨拶した。

ところが件の侍は案外平氣な態度で、剛情にも目通りを迫つてやまない。いかに鋭く嘲罵を浴せかけて門外に突き出しても、いつかな動かうともしない。門番の面々が困じ果てゝゐると、常でない門前の騷擾を通りかゝつた重臣が聞き咎め、聽て事の由を攝津守のお耳に達した。

豪膽な攝津守はこれ聞いて、

「何程の事やあらん」と、警固を嚴にし、件の侍を庭先に呼び入れて目通りを許したのである。

すると其の侍は盛んなる儀容を恐れる氣色もなく、靜々と歩を運ばせて、攝津守のお前遙かに來つて平伏した。見れば人品骨柄卑しからざる適な武者振りなので、攝津守は近侍の者に命じて先づ其の姓名を尋ねさせた。ところが前の通り「仔細あつて姓名の儀は明しかねる」と、いふ。「然らば何處の住人で、何等の用あつて參つた」と、重ねて尋ねさせた。すると其の侍は、

「拙者は戸隠山の住人で、ふとしたことから黒姫の琴の音を聞き、餘りの床しさに日毎御庭先に忍んで聽いてゐたところ、いつしか姫の色香に魂を奪はれ、恥しながら戀の奴となりました。最早姫なくては一日片時も命存ふべしとも思はれねば、卒爾ながら姫を所望に推參仕りました。よろしく御賢察を願ひ奉る」と、臆面もなく述べて、きつと攝津守に目を注いだ。

これを聞いた列座の重臣共は、

「さては案に違はず敵國の廻し者か、吾が君を狙ふ曲者に相違あるまい。住所姓名を明さぬさへあるに、藪から棒に姫君を所望するなど、噤言<sup>な</sup>けた世迷ひ言をぬかして、城の要害を探らんとするに違ひない。それ搦めとつて糺明せよ」と、敦圀さ立ちかゝらんとするを何、やら心に領いた攝津守はぢつと之を目で押し止め、徐ろに其の侍に向つて云ふには、

「戀は思案の外とやら、高い卑いの隔てないものなれば、そちの願も不憫に存ずれど、人一生の大事なれば姫の意中も確め、自らも篤と考ふべし。今より三日の後に再び來つて吾を訪へ。然らば確答を得さすべし」と、申し渡した。

之を聞いた其の侍は快く領いて、氣色立つ若侍共を後目に向け、悠々と攝津守の御前を退出したのである。

攝津守もそれと同時に座を立つて、近侍の者に何か耳打ちすると奥へ這入つてしまつた。

件の侍が城の大手を出ると、少し遅れてまた一人若侍が出た。其の若侍は見えつ隠れつ件の侍の後をつけて遂に二人とも遙かの山の端にかくれて見えなくなつた。

其の日の暮れ方、漸く尾行の侍が城に歸つて來て、攝津守に復命した。其の報告によると、件の侍は黒姫山に住む龍であつて、若侍が後をつけるとも知らず、とある池のほとりに行くと忽ち蛇體に變つて入水したといふのである。

其の中に約束の期日が來た。

龍は正体を知られたとも知らずに、また以前の侍になつて返答を聞きに來た。

攝津守は直ちに目通りを許して件の侍に向ひ、

「その方の所望に委せて姫を遣すべし、されど攝津守は何を辭興に氏素性も知らぬ婿をとりたるならんと云はれんも口惜しければ、三日の後再び來りて汝が正体をあらはし、城の周圍を三度廻れ。そを見届けたる上にて姫を得さすべし」と、申し渡した。

「さては露れたか」と、思つた件の侍は暫く默然として聞いて居たが、やがて領いて退出した。

攝津守は我が計略圖に當つたりと大いに喜び、早速家來に命じて領内の剃刀を全部徴發させた。そして龍の來るといふ日に、城の周圍に其の剃刀を刃を上にはらして隙間もなく植ゑさせ、攝津守は早朝から簾中、黒姫諸共に數多の家來を隨ひて天守閣に登り、龍の來るのを今や遅しと待つてゐた。

辰の時ばかりであつた。晴れた黒姫山の一角に一片の異様な黒雲が現れて見る間に大きくなり、長い尾を曳いて城の方に飛んだ。怪しの雲よと見てゐるうちに、一陣の生温い風が蛇が草葉の上を走るやうな音立てて吹いた。と、雲はいつの間にかやが霽れてゐた。見よ！龍は城の大手にあたつて物凄しい身の毛も竪立つ長大な姿を横へ、約束通り城の周圍を廻り初めたてはないか。

簾中、黒姫、腰元共は何れも身震ひして顔を掩うた。

忽ち一回廻つた。と、其の跡には毒々しい血が圓を描いた。二回廻つた。速力が前よりも大分鈍つてゐた。跡には血が川のやうに流れ、龍は無數の傷を蒙つて蘇芳を浴びたやうに赤くなつた。酸鼻の光景が針のやうに眼を刺した。三回目を廻り始めた龍

は謀られたと知るや、忽ち雲を起して虚空遙かに飛び去りながら、八十一枚の鱗を逆立て、怒れる角を振り、口からは火焰を吹き、血塗れになつた五体を悶え苦しみながら、城を睨んで終に黒姫山に其の姿を隠してしまつた。

簾中、黒姫を始め家來共は何れも心密かに何か後の祟が無ければよいがと心を痛めた。豪膽な攝津守は少しも意に介せず、

「さすが神通自在の龍奴も戀に目が眩み、我が計略に陥つて既に寸斷される處であつた。日ならず往生するであらう。でも愉快なことであつたわい」と、心地よげに笑つたのである。

それから間もないことであつた。

攝津守は近侍の者數人を従へ、密かに畫策する處あつて、忍んで上洛した。其の翌日であつた。

黒姫山の麓に俄かに大洪水が起つて見る／＼あたりは一面泥の海となり、城も次第

に危殆に瀕して來た。攝津守の留守に乗じて龍が復讐を企てたのである。

家臣一同は何れも城に馳せつけた。然し神通自在の龍の仕業とて、急に之を防ぐ策もなかつた。さりとて此の儘、主従諸共手を束ねて最後を遂げるも無念の至りである。一と先づ城を捨て、山上に遁れ、徐ろに之に對する計を立てようと云ふので、附近の山に一同避難した。

之を見た龍は益々怒つて更に一大洪水を起した。猛り狂つた怒濤は、とげ、とげ、しい、白い齒を鳴して、四方から山を噛み砕かうと突貫した。

黒姫主従の命は風前の燈である。

水は刻々に増して山の八分通りを没し去つた。龍は山を七卷半巻いて角を振り立て火焰を吐き、蟻の子一疋も通すまいと包圍した。

萬事休した。

人々は潔く互に刺し貫いて死なうと決心した。すると不思議にも山なす怒濤は皆卻けられて、それより上に這ひ登ることは出来なかつた。見れば汀に立ち並んでゐる樟

の大木が、さながら崩れ立つた味方の陣を一手に支へて阿修羅の如く荒れまはつてゐる勇士の如く、梢は関の聲をあげて這ひ登らうとする大波を驅逐してゐるのであつた。名木樟の奮闘で主従は辛うじて水難をば免れたが、突嗟の避難ですつかり糧食の用意を忘れてゐた。直ちに明日の食物に差問へる窮境である。さりとて落ちのびるべき船もなく、圍を衝いて糧食を運ぶ方法もない。殆んど進退茲に谷つたのである。

此の時黒姫は堅い決心の色を面に現はして一同に向ひ「かくなる上は是非もない。龍は自ら招いた事ながら、妾に迷うて父上の計略に陥り無数の傷手を蒙つた事なれば、我等親子を恨むも道理である。所詮、我が身一つを捨て、龍に與へなば水も收まり圍みも解けるであらう。今亂世に際し、殊に父上の御不在中、主従守りを捨て、外に漂泊へ、萬一城を敵に奪はれなば、それこそ末世までの恥辱、父上の御無念もさこそと思ひやられる。……龍に見込まれたを因果とあきらめ、我が身一つに此の大難を引きさうけまする程に、亡き後は皆の者忠勤を頼みまする。わけて大恩うけた母上様には先立つ不幸の罪を許し遊ばされ、逆縁ながら亡からん後は一遍の御回向を願はしう存

じます。さらば母上始め昔の者、随分堅固で暮されまするやう……」と、身も世もなきまでに泣き沈んでゐる簾中に今生の暇を乞ひ、強ひてとめる家臣を振り捨て、山を下りかけると、不思議や今迄怒號し逆巻いてゐた水は次第々々に退いて、さながら黒姫の道しるべするやうに、皆黒姫山の池に收つてしまつた。

黒姫は途中に於て不浄を見た。そこで一週間黒姫山の麓に滞在して身の汚れを去り、愈々山に分け入つたのである。二三の腰元が強ひて之に随つた。  
やがて龍の住む池畔に立つた黒姫は、

「もし、我龍に縁あらば今我が投ぐる品物の形の池現れよ」と、まづ女の魂の鏡を地に投げた處、忽ち池の傍に鏡形の池が出来た。次に櫛を投げた。また櫛形の池が出来た。かうして女の七つ道具を片つ端から投げると、皆たちどころに其の形の池が出来た。

「さては前世からの因縁であつたか、それなら今更通れる術すべもあるまい。潔く龍に嫁して我が家の安泰を計るであらう。さらば、さらば」と、殉死を迫る腰元共を押し止め

て、夫々形見を分け、黒姫は静々と汀に下り立ち、一人池に沈んで行つた。腰元共は愈々姫の最後と見てとつて身も浮くばかり泣き悲しんだ。

忽ち池心が泡立つたと見る間に、漫々と湛へた藍靨の波を分けて黒姫があらはれた。

「あれ黒姫様が、おなつかしや」と、見れば微笑を含んだ姫の下半身は既に龍に化して物凄い姿になつてゐた。

「あつ」と、驚いた腰元共は何れも石像のやうに立ち凍んでしまつた。其の時姫は冷たく堅い針のやうな聲で最後の言葉を残した。

「われ龍神たる間は攝津守領内の松の心を立たしめじ」と、いふかと思ふと次第に水中に沈んだ。

ざわ／＼と腥い風が吹いた。急に暗くなつた水面は大波が騒いだ。忽ち池水の中央がもく／＼と沸騰するやうに高まつたと思ふと其の水の山が左右に分れて、さあつと川のやうに流れた。と、其の割れ目から全く龍に化した黒姫が世にも恐しい姿で水面にあらはれた。鬼氣が轟々と人に迫つて、悸慄齒の根も合はぬ腰元共は何れも顔を掩う

て地に倒れ伏した。それが陰暦六月十七日である。それから後、毎年六月十七日には黒姫山に雲が棚曳き、尾を攝津守の城に渡すので、姫が生家を戀ひ慕うて其の魂が城にかへるのだと云はれてゐる。



野邊塚



古志郡の最北端、そこに鬱蒼たる森を繞らしてゐる一つの小さな村があります。福島村と云つて私はそこに生れたのです。

山間の僻地だけに文明の辛辣な空氣も、科學の明快な説明も浸潤してゐない醇朴な里であります。随つて珍奇な怪談や傳説が世間の荒い風にも虐げられずに、昔ながらの素直な姿に育てられてゐるのであります。

村を横切つて福島川が流れてゐます。村端<sup>ヒツ</sup>れの其の川邊には薄<sup>ウス</sup>や茅<sup>カ</sup>の類が生ひ茂つてゐて、川面<sup>カハ</sup>は見えない程であります。

岸の藪蔭に一つの石塔があります。雜草の中に半ば埋もれて堅く永久の沈黙を續けつゝ、滅入るやうな寂寥を楽しみ味うてゐるかのやうであります。そしてまた其の石

塔は一面の雨苔に覆ひ包まれてゐて、陰濕な蒼然たる物寂びた色を浮べ、碑名もなければ建立者の名もありません。随つて何年たつたか、何者が建てたか、また何者を埋めた標であるか薩張り判らぬのであります。

殊に月の良い夜などは、其の雨苔が月の光に照されて青白く冷く光り、さながら石の内部から光を發射するやうであります。そしてその光がまた不思議にも時々色を變へて動くのであります。それですからさういふ晩は誰も薄氣味わるがつて、一人では其のあたりに行くことを懼れて居るのであります。

暗い夜は亦、草蔭から地中に潜む魔の眼玉のやうな魅惑の光を發して、通行人の魂に迫るので、秋の夜更けて風立つた日など、其處を知らずに通りかゝつた人は、絶々に歎息する虫の音に交つて、がさ／＼と妖怪の走るやうにざわめく薄の葉擦れの音に襲はれて、魂を冷すであります。其の時、若し黒い葉蔭から其の幽暗な光に覗かれたら、足の竦むのを感じるてせう。

かういふ有様で、日の日中でも氣味わるがつて、今では其の附近の川では釣する人

も洩ぐ人もなくなつたのであります。

村の古老に聞いても石塔の由來を知つてゐるものもなければ、勿論、考證となるべき記録などのある筈もありません。かうして其の石塔は解け難い千古の謎を秘めて、夜な／＼呪咀の光を發して、何か時の至るのを待つてゐるかのやうであります。

私共はそれを、野邊塚と呼んで、口々にその奇異を語り傳へてゐます。

加  
治  
山





佐々木氏は不意に隣國の侵略を蒙つた。各所の砦は忽ち奪取された。勝に乗じた敵兵は城下に迫つた。佐々木氏は窮餘の策として、城のまはりにはさを作り、麓の田で刈り取つた稻を徵發して山上に運び、稻はさを作つてそれを楯に應戦した。

敵兵は晝夜一休みもせず、揉みに揉んで攻め立てた。籠城の用意を施す邊のなかつた城は日ならず落城した。數ある勇士は皆其の名のために花々しく討死した。城主佐々木氏は二三の近臣と一方の血路を開いて辛くも城から二山ばかりの奥山に遁れて、暫くその岩井戸の中に隠れてゐた。そして世の動靜を窺つて再舉の時機を待つてゐたらしいが、其の後どうなつたか更に其の消息は分らないのである。

後世、其の岩井戸の奇蹟から察するに、城の抜け道が此の岩井戸に出口を開いてゐたのではなからうか。落城の時、寶物を一切此の抜け道の穴に匿したのではなからうか。佐々木主従は其の岩井戸の中で悲しい末路の幕を閉ぢたてあらうか。其の子孫はどうなつたてあらうか。など、随分想像は逞しうして見ても一向証據となるべき手がかりが、今に發見せられぬさうである。

これは其の落城から數十年後の話である。

或る日のこと、山へ仕事に出た近村の或る貧しい樵夫が、此の岩井戸の縁よちに腰を下して骨休みをしながら、旬日の後には必ずやらなければならぬ振舞のことを考へてゐた。食器その他振舞に必要な道具類は大抵人から借して貰ふことに約束はしたけれども、座蒲團を借してくれ手がないので、ついそれが口に出て、

「誰か座布團を十枚ばかり借して呉れる人はないかなあ」と、嘆息した。

翌日また樵夫は其の山へ仕事に行つた。すると噂うわさ昔、嘆息した岩井戸の縁に座布團が十枚積み重ねてあつて、其の上に、「振舞が済んだら兩三日中に必ず此の場所に品物を返せ」と、云ふ意味のことを書いた紙片が載つてゐた。

樵夫は不思議に思ひながらも、「これも自分が正直にしてゐるものだから、神佛が憐んで借して下さつたに違ひない」と、ほくほく喜んで、其の座布團を借りて無事に振舞を済ませた。そこで早速振舞に残つたご馳走を添へて座布團をもとの岩井戸の縁に返

して置いたところが、いつの間にもやら座布団もど馳走も見えなくなつてゐた。

此の話が村中に擴つた。

それからは、村人は婚禮や葬式などに際して、衣裳や道具類が無いと、いつも此の岩井戸に来て借用を願ひ出た。そして翌日来て見ると願つて置いただけの品物はいつも井戸の縁に揃へてあつた。其の品物は何れも普通の人家には見られぬやうな、珍貴な高價なものばかりであつた。

麓の村に貪慾な婆々が住んでゐた。

或る時、此の岩井戸から金の茶釜を借用した。何に使ふ當もなく、また返済する心などは微塵もなかつたから、詐り定めた出鱈目の期限が経過しても、いつかな返さうともしなかつた。

それ以來、村人は永久に此の岩井戸から品物を借りることが出来なくなつたのである。其の時の金の茶釜は今に其の麓の村のどこかに寶物として祭つてあるさうである。

佐々木氏舊城址の土を掘ると、今でも焼けた米が発見される。それは、落城の際、焼けたあの稲はさの米であると云ひ傳へられてゐる。

また、此の山には七葉松と云つて、松葉が七本連つてゐる松があるさうである。稀にこれを見付けた人は印をつけて大喜びて家に歸り、移植の人夫を雇ひ、掘り取る道具を用意して來て見ると、いつも印は何でも無い普通の松の木につけ換へられてゐて、遂に、其の七葉松を手に入れた人は未だに一人も無いさうである。

か  
た  
が  
り  
松



××は京都の町をぶらぶら歩いてゐた。

正午頃であつた。

空腹を覺えたので、とある蕎麥屋に這入らうとすると、後から呼ぶものがある。振り返ると見た事もない若い女が馴れ／＼しく寄つて來た。

「人違ひぢやありませんか」と、××が云はうとすると、女は早くも其の心を讀んで取つて、

「初めてお目にかゝりますお方に、かういふ事をお願いするのは寔にお恥しい次第でございますが………」と、云ふ。

「はあ」と、××は怪訝な顔つきをした。



すると女は、

「私は、實は柏崎在茨目村のかたがり松でムいます。國に居る時、松の下をあなたが度々お通りになつた事をよく存じてをります。私は一月ばかり前に此の京都見物にまゐりました。つい遊び過したために、國に歸る路銀が足らなくなつて困つてゐます。暫らく路銀を貸して戴けませんでせうか」と云ふ。

藪から棒なので、××は貸したものであらうか、きつぱり斷つたものであらうかと云ふ心が急に紛糾を醸して言葉につまりながら、女の顔をまじく見てゐた。

「決して嘘いづはりは申しません。某月某日の今頃、かたがり松の東の枝に金を吊して屹度も返し致しますから、どうぞ借して下さいませ」といふ。

女の云ふことが疑ふには餘りに率直ではつきりしてゐた。一面識も無い人に對する不安は既に××の頭から淡らいてゐた。××は旅にあると云ふ心の警戒を容易に解いて、自分でも不思議な位思ひ切りよく、此の見知らぬ女に、其の願ひ通りの金を貸してやつた。

××はかたがり松の附近に住む男で、其の時矢張り京都見物に行つてゐたのであつた。

この事があつてから數日後、あらまし京都見物を終へた××は國にかへつて來た。もし騙されたんだとすると、如何にも大人氣ないと人に笑はれるのが恥しかつたので、松の女に金を貸した事だけは誰にも話さなかつた。

約束の日が來た。

××は只一人で、柏崎に用足しに行くと言ふ格好で、かたがり松の傍を走る道を歩いてゐた。どうもそれらしいものは松の東の枝に見えない。

「騙されたんだ」と、××は自ら嘲つた。

丁度、××が松の下へ行つた時であつた。頭が觸る程垂れ下つてゐた長い枝が、風もないのに鳥が飛んだ後のやうに、思ひ做しか揺れたやうな氣がした。ひよつと見上

げると松葉の茂みに、正しく返済の金が耳を揃へて吊してあつた。

其の時である。

××は松が梢を顛はせて、××の心に禮を云つた聲を聞えた、と、後で人に語つたのである。

茨目村の西方、縣道に近く田の中に、三抱に餘る一本の老松がある。千歳の枝を四方に垂れて、さながら大傘をひろげたやうで、夏の頃は涼蔭地を覆ひ、境内は村童の遊び場所になつたり、根方は行客午睡の樂地になつたりしてゐる。

もと此の松は老松神社として祀られてゐたもので、春秋祠賽の日は旗や幟を立てられて、笛や太鼓の音賑かに、小間物や駄菓子のお店が並んで、田圃道は珍らしくメリンヌの赤い帯や、蝙蝠傘が、ぞろぞろ通つたものである。それが明治四十年神社合併の行はれた時、村社白山神社に合祀せられてからは、毎年の祭祀も絶え、南方に垂れ下つた大枝は腕白小僧が下からぶら下つたり、其の上に乗つて揺り動かしたりした爲に枯

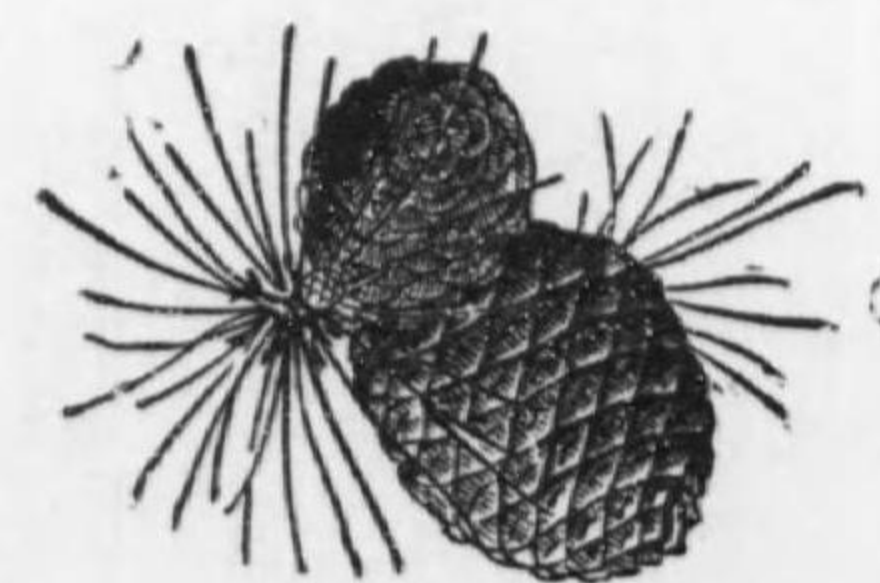
れてしまつて、昔日の俤はなくなつてゐる。

其の昔、此の松が京都見物に行つて居た一月餘りと云ふものは、葉が悉く赤くなつて、枯れたやうになつてゐたといふ。

お

す

よ



信濃川の中流、池津沿岸に釜が島と云ふ小さな島があります。昔、其の島の或る農家においよと云ふ妙齡な縹緞のよい娘がありました。

或る日、おいよが畑を打つてゐると、一つの珍らしい土器が鍬の先に出ました。愛らしい格好をしてゐるので拾ひ上げて何氣なく口にあてて見ると、忽ち一種の香液が滲み出て舌がとけるやうでありました。

驚いたおいよは早速飛んで歸つてそれを母親に見せました。母親は不思議に思つて舌にあてて見ると、香液どころか土臭いむかつくやうな香がするばかりなので、

「おいよは氣でも狂つたんじゃないかしら」と心配して、近所の人々からも味うてもらひました。併し誰の舌にも香液の味感は少しもなかつたのであります。